

## 別紙様式 1

(学 校 名) 神奈川県立横浜緑ヶ丘高等学校	基礎枠
指定第 I 期目	指定期間 04～08

## ①令和7年度スーパーサイエンスハイスクール研究開発実施報告（要約）

① 研究開発課題								
未来の担い手として、他者と協働して課題解決に導く科学的探究力を備えた人材の育成								
② 研究開発の概要								
<p>学校設定教科「緑の探究」における体系的な課題研究を中核として、すべての教科で探究的に学習し、課題研究と教科の学びを往還させることで「科学的思考力」を身に付け、「科学的探究力」を高める。外部機関等と連携しながら、未来の担い手として他者と協働して課題解決に取り組む「協働力」を育むとともに、研究に対する「倫理観」を身に付ける。</p> <p>すべての教科における探究的学習と体系的に探究を学ぶ「緑の探究」を通して、「科学的探究力」を育成する。外部機関等とも連携しながら探究することで、協働して課題に取り組む「協働力」を高め、課題の解決に導く科学的探究力を備えた未来の担い手を育成する。</p> <p>仮説1 「科学的探究力を体系的に育成する課題研究プログラムの開発」          仮説2 「科学的思考力を育成する探究的授業の実践」          仮説3 「外部機関等と連携し協働力を高め、国際性豊かな科学技術人材を育成」</p>								
③ 令和7年度実施規模					全校生徒を対象			
学科名	1年生		2年生		3年生		計	
	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数
普通科	279	7	279	7	271	7	829	21
理系	—	—	—	—	105	3		
文系	—	—	—	—	166	4		
計	279		279		271		829	
④ 研究開発の内容								
○研究開発計画								
1年次	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「緑の探究Ⅰ」を実施しながら、新たな指導方法の研究を行う。また、外部機関等との連絡と調整を進める。「緑の探究Ⅱ」の準備を進める。</li> <li>・国内SSH指定校のうち、県外の高校を交流対象校として、相互の交流をはじめめる。</li> <li>・Google Workspace for Education の生徒向け、教員向け研修を実施する。</li> <li>・生徒に1人1台端末を持たせての授業を実施する。</li> </ul>							
2年次	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「緑の探究Ⅰ」及び「緑の探究Ⅱ」を実施しながら、指導方法の研究を蓄積する。また、外部機関等との連絡と調整を進める。「緑の探究Ⅲ」の準備を進める。</li> <li>・「緑の探究Ⅱ」でプログラミングの技術を身に付けて後期からの課題研究に生かす。</li> <li>・長期休業中のスタディツアーなどを充実させる。</li> <li>・交流対象校との活動を活性化させ、国外の学校との姉妹校の設置に向けた準備を始める。</li> </ul>							
3年次	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「緑の探究Ⅲ」を実施しながら、「緑の探究Ⅰ」「緑の探究Ⅱ」の内容の検証を進める（外部機関等との関わり、探究サイクルの定着、情報活用等の内容など）</li> <li>・交流対象校との活動を充実させて、共同研究や共同発表の可能性を探る。</li> <li>・長期休業中のスタディツアーなどの生徒の活動機会を増やす。</li> </ul>							

4年次	・「緑の探究」の3年間の流れを検証するとともに、改善すべき内容の見直しを進める。また、外部から3年間の取組に対して評価してもらい、その内容を改善に生かす。
5年次	・第Ⅰ期の総括と評価を行い、それを報告書にして、広く発信する。

### ○教育課程上の特例

学科・コース	開設する科目名	単位数	代替科目名	単位数	対象
普通科	緑の探究Ⅰ	2	情報Ⅰ	1	第1学年
			総合的な探究の時間	1	
	緑の探究Ⅱ	2	情報Ⅰ	1	第2学年
			総合的な探究の時間	1	
	緑の探究Ⅲ	1	総合的な探究の時間	1	第3学年

「総合的な探究の時間」の各学年1単位（合計3単位）と「情報Ⅰ」（2単位）を合わせて「緑の探究」（5単位）とした。「情報Ⅰ」の内容は2年間にわたり「緑の探究Ⅰ・Ⅱ」の中で履修する。これによって、「総合的な探究の時間」で行う探究活動におけるデータ取得やその分析、発表などにおいて効果的な手法を活用することができるようになる。1学年の「情報Ⅰ」の内容は基礎的なものが中心であったため、2学年の探究活動では「情報Ⅰ」で学んだ成果が広く活用されることになる。

### ○令和7年度の教育課程の内容のうち特徴的な事項

学科・コース	第1学年		第2学年		第3学年		対象
	教科・科目名	単位数	教科・科目名	単位数	教科・科目名	単位数	
普通科	緑の探究Ⅰ	2	緑の探究Ⅱ	2	緑の探究Ⅲ	1	生徒全員

### 探究活動の内容

	「緑の探究Ⅰ」	「緑の探究Ⅱ」	「緑の探究Ⅲ」
4月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・オリエンテーション</li> <li>・縦割り企画「紙を飛ばそう」</li> <li>・KJ法、ワールドカフェ</li> <li>・3学年ポスター発表見学</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・オリエンテーション</li> <li>・縦割り企画「紙を飛ばそう」</li> <li>・3学年ポスター発表見学</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・オリエンテーション</li> <li>・縦割り企画「紙を飛ばそう」</li> <li>・1、2学年に向けて『緑の探究Ⅱ』のポスター発表</li> <li>・グループ、テーマ決め</li> <li>・担当教員（分野）の決定</li> </ul>
5月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・マインドマップ</li> <li>・外部連携団体による講義「研究とは」</li> <li>・グループ、テーマ決め</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・グループ、テーマ決め</li> <li>・担当教員（分野）の決定</li> <li>・運営指導委員による講義</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・調査、実験</li> <li>・運営指導委員による講義</li> </ul>
6月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・計画作成</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・計画作成</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・調査、実験</li> <li>・発表要旨作成</li> </ul>
7月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・計画発表</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・計画発表</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日本語ポスター作成</li> </ul>
8月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・グループの担当アドバイザー（外部連携団体）の決定</li> <li>・アドバイザーによる指導助言（対面）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・調査、実験</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日本語ポスター発表</li> </ul>
9月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・調査、実験</li> <li>・アドバイザーによる指導助言</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・調査、実験</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・英語ポスター作成、発表</li> <li>・振り返り</li> </ul>

	(オンライン、～1月)		
10月	・調査、実験 ・中間発表	・調査、実験	
11月	・アカデミックキャラバン ・ポスター作成	・アカデミックキャラバン ・調査、実験 ・統計講座	
12月	・ポスター作成	・ポスター作成	
1月	・クラス内ポスター発表 ・学年ポスター発表	・分野内ポスター発表	
2月	・振り返り	・学年ポスター発表 ・振り返り	
3月	・全体発表 ・次年度準備	・全体発表 ・次年度準備	

### 探究活動と他教科・科目との連携

「緑の探究Ⅰ・Ⅱ」の評価のためのルーブリック《③-1》は必要に応じて、各教科でも活用し、課題研究と他の教科・科目との間での往還を図った。

「緑の探究Ⅲ」では英語によるポスター作成と発表を実施して、英語科の教員が作成指導と評価を行い、それを英語の成績に加えることにした。

### ○具体的な研究事項・活動内容

#### テーマⅠ. 学校設定科目「緑の探究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」の設置（仮説1）

##### 「緑の探究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」（共通）

- これまでの3年間の取組を踏まえ、本校の進め方の実態に即したオリジナルの補助教材として「課題研究テキスト」《③-2》を作成した。
- 5月に1学年は連携団体のアドバイザーから、2、3学年は本校運営指導委員の京都大学 宮野公樹 准教授に來校いただき講義いただいた。
- 1、2学年を中心に年間計画を見直し、1学年では、外部団体との関わりを夏休み明けから5月に変更し、2学年では、計画発表を夏休み明けから7月に変更した。また、学年末試験後の時間割を工夫し、3月には次年度の「緑の探究」を先行実施する予定である。それにより、今年度と比べて「緑の探究」を4時間多く確保できる。
- 探究の集大成となる学年発表の会場を、外部でのポスター発表のイメージを持たせ、保護者も参加できるようにしたため、教室から体育館へ変更した。
- 昨年度の課題として、授業内容について十分な連絡ができていなかったことから今年度は月に1度担当者会議を設定し、見通しを持った指導ができるようにした。

##### 「緑の探究Ⅰ」（第1学年、2単位）

- 研究テーマは「水」。外部連携団体として本年度より、海洋研究開発機構（JAMSTEC）、横浜薬科大学に加わっていただき、5機関よりアドバイザーとして指導助言をいただいた。《③-14》
- 2年前までは各アドバイザーから研究テーマをいただく「ミッション型」としていたが、生徒から「テーマが制限されていて自由度が少ないためやらされ感がある」という声があったため、昨年に生徒が自由にテーマを設定する「興味関心型」とした。それにより、生徒の自由度は増したが、一方でテーマを自分たちで設定することに難しさを感じて先に進まないグループや「生徒の自由度が高く、自分たちの強みとしている研究の指導助言が難しい」というアドバイザーの声があった。このことから、本年度はどちらにするかを生徒が選択できる「ハイブ

リッド型」として研究を進めた。

- アドバイザーからは、実験計画書について対面による指導助言をいただいたほか、その後の調査・実験においても進捗状況をオンライン上で報告した。また、気になる内容についてもオンライン上で相談し、ご回答いただいた。
- 司書と連携し「知の情報拠点」の活用方法の説明を行ったことで、先行研究調査をより推奨することができた。
- 情報Ⅰの内容として1学年では、「データ分析」「統計的活用」「テキストマイニング」を主に扱った。

#### 「緑の探究Ⅱ」（第2学年、2単位）

- 本校で利用可能な実験器具を紹介する動画をオリエンテーションで上映し、生徒が具体的な実験をイメージしながら、自身の探究テーマの可能性を広げる機会を提供した。
- 過去の運営指導委員の助言を参考にして、ポスターの様式を指定せず、生徒がオリジナリティを持って作成できるようにした。
- データ処理のため、数学科の教員による統計講座を実施した。
- 情報Ⅰの内容として2学年では、「プログラミング」「ネットワークの活用」「latex」を主に扱った。

#### 「緑の探究Ⅲ」（第3学年、1単位）

- 4月から課題設定をし、6月中旬に発表要旨の作成、8月の夏休み明けに日本語ポスター発表、9月下旬に英語ポスター発表を実施した。
- 発表要旨の評価には成果物評価ルーブリック《③-1》を活用することで、本校では初めて研究内容の評価を行った。

#### テーマⅡ. 探究的な授業を通じた「科学的思考力」の育成（仮説2）

- 令和7年度は過去3年の取組を踏まえ、科学的思考力の3つの力を伸ばすことを前提に置きつつ、より効果的な取組と評価方法の確立をねらう力を各教科で「観察力」「分析力」「発信力」から1つ選択し、「探究的な学習」を取り入れながらその能力の向上を目指した。
- 第1回「生徒による授業評価」の実施
- 第1回「生徒による授業評価」の結果を踏まえた、各教科での課題の把握と改善策の検討
- 各教科で設定した課題や改善策を踏まえた授業実践
- 公開研究授業・研究協議の実施
- 第2回「生徒による授業評価」の実施
- 今年度の振り返り及び次年度以降の具体的な計画立案

#### テーマⅢ. 「横浜」の地域資源や外部機関等との連携を活かした取組の充実（仮説3）

##### 企業、大学、研究機関等との連携の推進

(1) 「緑の探究Ⅰ」における外部連携アドバイザー

株式会社オオスミ、日本大学生物資源科学部、神奈川県衛生研究所、横浜薬科大学、海洋研究開発機構（JAMSTEC）の計5団体に次のとおりご協力いただいた。

- ・講義「研究とは」
- ・研究テーマ（ミッション）の提供
- ・グループ研究への指導助言（対面：1回、オンライン：GoogleClassroomを通じて2週に1回程度）
- ・学年発表の見学及び講評

(2) 企業ラボ見学

希望者を募り、株式会社オオスミ（横浜市瀬谷区）、オルガノ株式会社（相模原市）のラボを見学した。

### (3) 「らいふらりー」（社会人講話）

1 学年生徒に向けたキャリア教育の一環として、昨年度に引き続き実施。講師には医師、日本語教師、裁判官、大学教授など高校生のイメージしやすい職業の方々から、電鉄会社、環境問題に取り組むアパレル企業、CM 制作会社、幼児の遊び場づくりを行う企業といった多岐にわたるジャンルの社会人の方々に来ていただいた。

## 地域及び小・中学校との交流の推進

### (1) 科学系部活動の地域連携活動

地域のイベント（本牧ハワイアンフェスタ）に実験屋台を出店し、ワークショップの運営や日頃の活動を紹介しながら、地域住民との交流を図り、地域に密着した活動を広げた。

### (2) 「みんなの放課後クラブ」への参加

夏休みに生徒の SSH 研究推進委員会が地域児童の集う「みんなの放課後クラブ」に 2 回参加した。それぞれ生徒のみで企画・運営をおこなった。

企画①「割れないシャボン玉」「塩シャーベット」

企画②「マーブリングアート」「リサイクル写真立て」

## 他の高等学校との連携推進

今年度は、希望生徒が次の高等学校と交流を行った。

福島県立ふたば未来学園高校（ふくしま学宿）、鳥取県立鳥取西高校（鳥取スタディツアー）、北海道釧路湖陵高校（釧路湿原スタディツアー）、マウントロスキルグラマースクール（ニュージーランド海外研修）、横浜インターナショナルスクール

また、県立横須賀高等学校の探究発表会に参加し、口頭発表を行った。

## テーマⅣ. 未来の担い手の育成に向けた国際性を育む取組の充実（仮説 3）

### (1) GTEC

今年度も英語の 4 技能の伸長をはかるため、8 月に全生徒を対象に実施した。

### (2) 英語ディベート大会

令和 7 年度 PDA 神奈川県高等学校即興型英語ディベート交流大会に参加した。

### (3) 国際交流

- 第 9 回アフリカ開発会議（TICAD9）テーマ別イベントに参加し、『サステイナブル（持続可能）な食』についてアフリカの高校生とディスカッションをした。
- 昨年度に引き続き、8 月にニュージーランドへの 2 週間のホームステイ、12 月にタイ北部への 1 週間の海外研修を実施。いずれにおいても現地の学校との交流を行い、実施後は研修成果の全体発表を行った。
- 横浜インターナショナルスクールとは 1 月に相互の授業に参加する企画を実施した。
- 本校同窓会「牧陵会」の支援により継続的に実施している「学びの奨励基金」を活用し、海外での活動としては、1 名ベトナムで研修を行った。

## その他の取組

### ○ 知の情報拠点の設置

図書館では、「アカデミックキャラバン」の講師山本貴博教授（東京理科大学）やニュージーランドのブースをつくるなど、SSH の取組を発信できるよう、レイアウトを工夫した。また、生徒の探究活動の記録を残しておけるよう、生徒の研究要旨を本校関係者が閲覧可能な「緑高ポータル」内に保存する準備を進めはじめた。

### ○ 科学系研修プログラム

### (1) スタディツアー

スタディツアー	参加者数
ふくしま学宿	4人
鳥取県 海・星・砂のスタディツアー	9人
釧路湿原スタディツアー	7人
タイ北部スタディツアー	4人

昨年度に引き続き、福島、鳥取、釧路、タイ北部のスタディツアーを実施。

### (2) 学会や外部発表会への参加

今年度、新たに「県立横須賀高等学校探究発表会」と「第21回日本感性工学会春季大会」に参加した。詳細は《③-6》参照。

### (3) SSH ミニ講座

アカデミックキャラバンで講演いただいた山本貴博教授（東京理科大学）を再度招き、当日時間の都合上お伺いできなかった質問に回答していただく企画を実施した。希望者のみの参加とし、密度の濃い内容となることをねらいとした。

#### ○ 科学的部活動の活動

化学生物部、数学物理部、地学部ともに、本校文化祭において科学的な内容の展示やワークショップを実施した。その他の活動の例として、企業の協力を得て人工衛星の観測に関する講習会を地学部生徒向けに実施した。

#### ○ アカデミックキャラバンの実施

鎌倉芸術館で「科学のメガネをかけると世界は変わる～過去・現代・未来～」という題で、東京理科大学の山本貴博教授に講演していただいた。また、夏のスタディツアーやニュージーランド海外研修、神奈川県教育委員会主催のメリーランド派遣事業の報告を行った。

#### ○ 科学的コンテスト等への参加

詳細は《③-6》参照。

#### ○ SSH 研究推進部会（教員）

3回の教員向け研修を実施した。第1回は本校のSSH研究課題の説明と理解の浸透を目的に研修会を行った。第2回は本校SSH運営指導委員の宮野公樹氏による、課題研究における「問いの立て方」に対する考え方や教員の指導方法に関するアドバイスを含む講演会を行った。第3回は本校教員による生成AIの利用法や注意点についての講習会を行った。

#### ○ SSH 研究推進委員会（生徒）

生徒企画実施時期	主な実施内容
4月	学年横断企画「探究はじめ」企画・運営
夏季休業、春季休業	放課後クラブの企画・運営ボランティア
10月、3月	SSH 運営指導委員会参加(生徒目線での成果・課題の共有)

週に1回生徒のみでの会議を行い、月に1回は教員も入り、生徒主体で SSH 関連事業に関する課題の整理・情報交換・意見集約などを行った。SSH 生徒運営推進委員会を中心に、地域の団体と協力しながら児童向けのミニ科学教室のような企画を行った。春季休業中には、夏に訪問した放課後クラブの児童保護者を対象に学校に招き、親子で楽しめる企画を計画している。

#### ○ 「緑高 SSH」の発行

年間3回21号～26号を作成した。

### ⑤ 研究開発の成果

（根拠となるデータ等は「③関係資料」に掲載。）

テーマⅠ. 学校設定科目「緑の探究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」の設置（仮説1）

#### 「緑の探究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」（共通）

生徒アンケート『現在自分には「科学的探究力」がどれくらいあると思いますか？』の項目について、現3学年の回答を1学年時（2年前）の回答と比較すると、「②どちらかというもない」「①

まったくない」と回答する者が減少し、「④かなりある」と回答する者が1学年時の9.7%から3学年時には19.4%と増加している。《③-3 表1》このことから、本校での学校生活を積み重ねるにあたり、「科学的探究力」が高まったと感じている生徒が増加していることがわかる。なお、年度内においても1、2学年を対象として同じ項目を7月と12月で比較したところ、「④かなりある」「③どちらかというところ」と回答する者が12月に増加した。《③-3 表2》

また、3学年で作成したポスターの「背景・目的」のルーブリック評価を比較(76、77期はポスターの評価をしておらず、この比較のために遡って評価をしたため、半数の抽出)したところ、SSH以前の76期と比べて、77、78期ではA評価とB評価の割合が大きく増えた。《③-4》このことから、SSH指定後には、先行研究を引用しながら、研究の意義やこれまでに明らかになっていることについて説明できる生徒が増えたことが読み取れ、本校での取組が「科学的探究力」の育成に結びついていると考えられる。

これまでの取組を踏まえ、今年度改善した内容については職員と外部団体のアンケートからおおむね良い評価を得た。特にこれまでのSSH事業の推進に関する課題となっていた「職員間での情報共有」については、アンケートの記述より多くの先生が考えていることと、本校のSSH事業を肯定的に捉えている先生が多いことがわかった。《③-7,8》

「倫理観」の育成状況の把握については、「研究倫理」の幅について整理しきれていないため、現時点では具体的なルーブリックの作成には至ってはいない。ただし、本校の8割以上の教員が「緑の探究」の担当として指導に携わっており、今年度は運営指導委員会からの助言を踏まえ、ポスターのフォーマットを指定せず進める中で、「参考文献」の記入に関する指導を共通の重点項目とし、「倫理観」を身に付けさせる指導を実施した。その結果、すべてのポスターに「参考文献」の記入がされていた。全校体制を構築するための基盤が確立しつつあると言える。

#### 「緑の探究Ⅰ」(第1学年、2単位)

グループ研究のテーマを「ミッション型」と「興味関心型」のどちらにするかを生徒が選択できる「ハイブリッド型」にした結果、「興味関心型」のテーマ選択をするグループの方が多かった。ただ、その中には「興味関心型」としてテーマ設定しつつも「ミッション型」のテーマを参考にしながらつくられたテーマも含まれているため、今年度連携団体数が増加し、ミッションが増えたことでテーマ設定の幅が広がったことがわかった。一方、連携団体の専門的な指導を受けたいグループは「ミッション型」に取り組んでいたことから、「ハイブリッド型」が功を奏した形となった。

#### 「緑の探究Ⅱ」(第2学年、2単位)

年度当初の実験器具紹介動画の視聴は、具体的な計画を立てる上で有効であったように思われる。

#### 「緑の探究Ⅲ」(第3学年、1単位)

全授業終了時の「緑の探究Ⅲに興味深く意欲的に取り組んでいる」のアンケートでは、肯定的な回答(そう思う・どちらかというところ)が全体の89%であった。《③-5》

### テーマⅡ. 探究的な授業を通じた「科学的思考力」の育成(仮説2)

各教科においてルーブリックを用い、科学的思考力の育成状況を見取る取組を試行的に実施した。その成果として、昨年度の取組を一覧にまとめ、共有することができた《③-9》。今年度の取組については年度末に作成予定。

#### ○ 「生徒による授業評価」の結果から《③-10》

・検証の指標としている5つの質問について分析をすると、第2回の結果では、すべての質問項目で4段階評価の上位2つの評価をした割合が高く、教科学習を通して課題研究にも必要となる力の育成ができており、「資質・能力ベースの教科横断」と「課題研究と教科学習の学びの往還」が果たせている。この結果は後述の教員アンケートの結果にも裏付けられる。

・5つの質問のうち、第1回と第2回の比較で上位2つの評価をした割合が大きく上昇したもの

は質問③の「観察力」が身についたと感じる」(+5.87ポイント)と質問⑤の「発信力」が身についたと感じる」(+4.99ポイント)の2つである。

#### ○ 教員アンケートの結果から

・「科学的思考力」育成の実現に向けた取組については、どの取組も有効・おおむね有効と感じていることが伺える。「生徒による授業評価」にも結果として表れているため、教員側の取組が生徒の能力向上につながっていると見える。《③-11》

#### テーマⅢ. 「横浜」の地域資源や外部機関等との連携を活かした取組の充実（仮説3）

教員向けのアンケートより、『「科学的思考力」「課題発見・設定能力」「課題解決能力」からなる「科学的探究力」や「協働力」の育成について「緑の探究」は有効であるか』の項目では、各担当者から「④有効である」「③おおむね有効である」との肯定的な回答が、それぞれ「緑の探究Ⅰ」④:42.9%③:50%、「緑の探究Ⅱ」④:36.4%③:54.5%、「緑の探究Ⅲ」④:30%③:60%となっている。自由記述では、「探究のサイクルが生徒に定着してきている」や「実験が失敗しても『なぜ失敗したのか』という理由を考え、次のアクションに繋げるスキルが向上している。」等あげられていた。《③-12》

#### テーマⅣ. 未来の担い手の育成に向けた国際性を育む取組の充実（仮説3）

GTECの結果から、探究活動で英語による発表を実践している3学年において、「書く」の能力がCEFR-JのB1レベルに到達し、伸長が見られた。《③-15》

令和7年度 PDA 神奈川県高等学校即興型英語ディベート交流大会では、一部の生徒が個人での表現を評価され、個人賞を獲得した。

ニュージーランドの渡航人数を希望者増加に伴い26人とした。引率人数を増やさなくても大きなトラブルなく対応できたことから、次年度も同程度の人数で実施予定である。なお、SSH指定当初から、姉妹校提携先を探していたが、この夏、渡航先のマウントロスギルグラマースクールとの正式な姉妹校提携が実現した。この研修に参加した生徒のアンケートでは、自分の英語力に「自信がない」と回答する者が渡航の前後で減った。《③-16》 また、英語力の変化として「話す力」と「聞く力」は「自信がある」「どちらかといえば自信がある」のポジティブな回答しかなかった。《③-17》 このことから参加した生徒の英語力が高まる取組として成果があったと考えられ「国際性」の育成に向けて有効な事業として引き続き進めていく。

今年度「学びの奨励基金」を活用し、ベトナムで研修を行った生徒は、3月に県教育委員会主催のメリーランド派遣事業に参加した生徒となっており、研修先をベトナムに選んだ背景には、「アメリカで実際に現地に出向き多様性の文化を学んだことで、アジア圏での文化や暮らしに興味を持ったため参加することとした」との回答があった。

#### その他の取組

##### ○ 知の情報拠点の設置

中間評価を踏まえ、本校としての特徴を出せる取組としてどのようなことができるかを第1回運営指導委員会でご意見いただき、今後の目指すすがたを整理することができた。《③-19》

##### ○ 科学系研修プログラム

これまでの実績より、教員が見通しを持って計画を立案することが可能となり、研修のねらいや研修後に全体発表があることを事前学習で十分に連絡できた。このことから、全体発表を見据えて研修に取り組む生徒が増加し、全体発表もこれまでより成果を意識した内容となった。

##### ○ 科学的部活動の活動

各部活動の部員たちは、部の活動を積極的に行うだけでなく、個々の生徒が「科学の甲子園」や「科学系オリンピック」などの活動にも参加し、多くの生徒がSSHに関わる活動の中心メンバーとなっている。

## ○ 科学的コンテスト等への参加

少しずつではあるが、出場する大会等は増加している。指導する教員の異動があっても継続して出場を促すような体制づくりは進めていくこととする。《③-6》

### ⑥ 研究開発の課題

(根拠となるデータ等は「③関係資料」に掲載。)

## 「テーマⅠ. 学校設定科目「緑の探究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」の設置(仮説1)

### 「緑の探究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」(共通)

教員アンケートから、今年度開発したテキストの作成や内容には肯定的な回答が多い一方で、それを『「緑の探究」で自分なりに補足して活用』したり、『「緑の探究」以外で活用』したりする回答が少なかった。「緑の探究」と各教科の往還を目標として進めていることから教科内の授業でも可能な範囲でテキストを扱うことで、生徒及び教員にとってテキストが身近になり、「緑の探究」の指導において活用できる機会が増えることが考えられる。《③-7 図1、2、3、4》

「倫理観」の育成状況について、当初生徒のアンケートから読み取ることとしていたが、取組を進める中で、そこでの回答から検証することは困難と判断した。「研究倫理の幅」を改めて整理し、ルーブリック評価として検証できる準備を次年度に改めて行うこととする。

### 「緑の探究Ⅰ」(第1学年、2単位)

実験の数が多くなり、理科教員の準備の負担が増えた。全校体制の構築に向けて、担当教員で役割分担をする等軽減できる方策を来年度からの実現に向けて検討していく。

### 「緑の探究Ⅱ」(第2学年、2単位)

実験器具の紹介に重点が置かれたため、文献調査や社会調査、フィールドワークなど、実験以外の手法を考えている生徒へのアプローチが不十分であった。これまでも社会調査において人権感覚に欠ける回答をする生徒がいたことがあった。授業計画を見直し、「倫理観」を育成できる内容を取り入れることとしていく。

### 「緑の探究Ⅲ」(第3学年、1単位)

9月の英語ポスター発表も1、2学年に見せることを検討したが、学年ごとに授業時間が異なる関係で「希望者のみ見学可」となった。今年、1、2学年で体育館での実施ができたことから、3学年についても同様に実施し、1、2学年が参加できる環境を整えることで、最終的なゴールの見通しを持たせることができ、生徒のさらなる意欲向上を期待できる。

## テーマⅡ. 探究的な授業を通じた「科学的思考力」の育成(仮説2)

### ○「生徒による授業評価」の結果から

・「教科の学びにおいて「発信力」が身についたと感じる」に対する高評価の割合が他の質問項目の回答に比べ低い。この傾向は過去3年についても同様である。

・各教科のテーマが分散した今年度は「観察力」と「分析力」については例年並みの回答結果となったが「発信力」については過去最低の結果となったことから、「発信力」の育成については教科で意識的に取り組む必要がある。《③-10》

### ○「科学的思考力」の高まりについて教員が見取れるような評価方法の確立について

・各教科でルーブリックを用いた評価方

法の確立を目指しているが、各教科での議論やアンケートなどから実現が難しいという声が多い。理由としては、①ルーブリック評価の観点と尺度は学習単位(単元)ごとに作成し、その評価結果の集計は異なる単元の評価結果とは比較できないものであること。②他教科の取組でも生徒の能力が向上するため特定の教科の成果として捉えることができないなどが挙げられる。一方教員アンケートでは「さまざまな授業で探究的な学習を行うことができた結果として探究の授業にて成果が出たと感じた」という声もあり、課題研究の質の向上に生徒の能力の高まりを見出す教員もいる。《③-11》

実際、緑の探究Ⅲの発表要旨またはポスターの背景と目的についてルーブリック評価をし

た比較ではSSH 1 期生・2期生には以前に比べ評価の向上がみられている 《③-4》

### ○まとめ

昨年度から、各教科でルーブリックを作成しその評価結果を見とる取組をしているが、これを継続的に全校体制で取り組むにはもう少し検討の余地がある。各教科内での評価という視点にこだわらず、課題研究の成果物の評価とその共有をもって「科学的思考力」の高まりを見取るなど、新たな視点での評価方法の検討の必要性がある。

研究授業等ではテーマを意識した授業展開がみられるが、日ごろの各教科における実践とその成果を見とる方法の確立が不十分である。各教科における「科学的思考力」の共通理解を深め、その評価方法について検討をする必要がある。

### テーマⅢ. 「横浜」の地域資源や外部機関等との連携を活かした取組の充実（仮説3）

1 学年を対象としたアンケート『「緑の探究」に興味深く意欲的に取り組んでいる。』の回答を4月、7月、12月で比較したところ「④そう思う」と回答する生徒が徐々に減少した。理由としては、4月は新しい活動への期待感や、テーマ選びなど、新鮮な刺激により興味が高かったが、7月・12月（実践・分析期）にかけて、実際に調査を行い、制約がある実験や情報の整理・分析をする中で「先行研究を探さないといけない」「思い通りにデータが集まらない」といった壁に直面し、意欲が低下したと考えられる。改善方法としては、「優れた結果を出すこと」が大切なことではなく探究のプロセスが大切なことであり、ありのままの結果やそこから考えられる考察をポスターには載せることを認識させる必要がある。《③-13》

「緑の探究」で今年度よりルーブリック評価を実施した。それにより、生徒の実態等把握できたことから「課題発見・設定能力」「課題解決能力」「協働力」の育成状況を見取るルーブリックについても次年度には作成し、活用できるようにする。

### テーマⅣ. 未来の担い手の育成に向けた国際性を育む取組の充実（仮説3）

今年度より、ニュージーランド研修の事前事後アンケートを活用して国際性の育成状況把握に努めたが、アンケート項目を整理したり、その回答をより細かく分析したりすることで、生徒にとって英語力や国際性を高める事業として希望者増加につながる事が考えられる。国内の交流活動も含め、校内及び外部へ発信する体制を整えることで進めていく。《③-16, 17》

### その他の取組

#### ○ 科学系研修プログラム

他校とのかかわりについては多くの研修で「交流」にとどまっている。今後『科学的なつながり』（相互の探究発表会や共同研究）の構築に向けてどのような手立てが必要となるかを先進校等の取組を参考に検討していく必要がある。

#### ○ 科学的部活動の活動

顧問の交代により、活動が失速してしまった部活動があった。これまで部の活動を教員が主導していた部分があったことは反省すべき点であり、部員が主体的に活動を盛り上げられるようなサポートが必要である。

#### ○ SSH 研究推進部会（教員）

課題研究の指導に関する研修となることが多いが、SSH の取組は課題研究に限らず多岐にわたっているため、その学校全体としての活動の理解を深め、多くの教員の参画を促せるような研修の必要性を感じる。

## ②SSH 中間評価において指摘を受けた事項のこれまでの改善・対応状況

### ① 研究開発計画の進捗と管理体制、成果の分析に関する評価

【研究開発のねらいの実現にあたり、評価項目の内容がおおむね達成されている】

- 「緑高生ポータル」、「探究で使える便利サイト集」、「探究ノート」や各種のループリックの開発等研究開発が進展していることは、評価できる。
- 教員有志による「SSH 研究推進部会」と生徒による「SSH 研究推進委員会」を組織して、具体的な方策を検討していることは、評価できる。
- 全教科で探究的授業を展開する授業改善の取組が拡大しており、今後の成果を期待する。
- 図書館とコンピュータ室を連携した「知の情報拠点」の構築として、今後は司書の専門性を活かす取組についての成果を期待する。

<改善・対応状況>

- 「緑高生ポータル」はサイト内に3年生が作成した「研究要旨」を保存し、学校関係者が閲覧できるようにする準備をしている段階である。今後、そのデータを蓄積し、これまでの研究成果を残していくことで計画している。
- 「SSH 研究推進委員会」は、年度初めの「縦割り企画」、夏季休業中の「放課後クラブの企画・運営ボランティア」を行っている。また、運営指導委員会に参加し、今年度の取組を報告している。これまで「縦割り企画」と「放課後クラブの企画・運営ボランティア」は、それぞれイベント的に行っているように見えたが、最近は、実施後の振り返りを踏まえ、前回の取組みからのつながりや実施の目的等を十分に議論してから展開する姿が見られるようになった。教員有志による「SSH 研究推進部会」は、現在職員研修として、職員全員を対象として実施。一方、グループ員以外でも SSH としての進め方について提案したい教員もいることからタイミングを見て有志にて会議を設定することを検討している。
- 探究的授業については、各教科で取り入れようとしている様子が見える。一方で、50分の授業時間の中で実施するには難しいという声もある。このことから、令和9年度から1コマの授業時間を65分で実施し、1時間の中で生徒がじっくり問題と向き合える時間や学びを振り返って言語化する時間を確保することで進めている。
- これまでも学校司書は「緑高ポータル」の使用方法や「論文の読み方・探し方」等で授業運営に関わってきた。今後は、「知の情報拠点」の構築を目指し、「緑高ポータル」をさらに充実させるために司書のサポートを得ながら準備を進めている。

### ② 教育内容、指導体制等に関する評価

【研究開発のねらいの実現にあたり、評価項目の内容がおおむね達成されている】

- 授業改善や課題研究の支援として図書室や理科室の活用利便性を高める取組には特徴があり、先進事例としての成果を期待する。
- 教育課程として「資質・能力ベースの教科横断」を確立しようとしており、普通校でも使えるような教科ごとの資質・能力の明確化と連携の一覧表等の作成と実施効果の検証を期待する。
- 教職員の指導力向上が望まれるとともに、探究的な授業の在り方について教職員間で共通理解を図る必要がある。

<改善・対応状況>

- 課題研究活動について、現在学校が保有する器具をリスト化し生徒に公開した。また生物室には生徒が活動に利用できる器具をまとめて保管することで、授業前の朝の時間や放課後に生徒が自主的に活動に取り組みやすい環境を整えた。授業時間外に理科室を訪れて測定器具の操作方法を事前に確認したり、追加の実験を行ったりなど、積極的な取り組みがみられるようになった。
- 生徒の課題研究に関わる実験について事前に実験計画書(オーダーシート)を提出させることで実験準備がスムーズにできるようになった。また、実験内容や使用器具を事前に把握できることで、利便性を考慮した活動場所の割り振りや、保有台数が少ない実験器具の共用などができている。
- 授業力向上の取組によって、各教科で探究的な学習の実践が進んでいる。各教科で育成すべき資質・能

力についてはまとめられているが、他教科の取組の共有とともに具体的な連携まで活動を進められていない。各教科で実施している探究的な学習の具体例とスケジュールを共有するところから始め、効果的に連携できる機会を検討したい。

- 課題研究の授業に対しては、担当者会議を月に1度のペースで実施することで、担当者が授業のねらいと内容を理解したうえで指導できるようになった。また、担当者が多くとも当事者意識と授業づくりに参画する姿勢を高めることができた。

### ③ 外部連携・国際性・部活動等の取組に関する評価

【研究開発のねらいの実現にあたり、評価項目の内容がおおむね達成されている】

- 大学や企業との連携について、連携先と、支援を求める探究活動との間に不整合が起こらないよう、管理機関を含めた組織的な取組のシステム開発と公開を期待する。
- 大学や地元企業との連携による理数系教育の強化が計画進行であり、今後の深化を期待する。
- 県外のSSH指定校との交流機会となるスタディツアーは成果が認められるので、今後の取組拡大を期待する。

<改善・対応状況>

- 現在、「緑の探究Ⅰ」において5機関よりアドバイザーとして指導助言をいただいているが、各機関の負担軽減及び生徒の実態に沿い手厚いアドバイスをいただくことを踏まえ、少し増やしたいと考えている。大学や企業と継続的な連携をしていくため、管理機関に相談しながら進めていく。
- 今年度は、2、3学年の探究の充実のために京都大学から宮野公樹准教授、SSHミニ講座として東京理科大学の山本貴博教授を学校に招き、講演及び生徒の質問に対応していただいた。また、企業ラボ見学として、株式会社オオスミ（横浜市瀬谷区）、オルガノ株式会社（相模原市）のラボ見学を実施した。
- スタディツアーは現地でのフィールドワーク・暮らし・文化体験といった、日常生活の中では経験できない「課題発見・解決学習」の場となっている。SSH指定校との交流機会を通して生徒自身のモチベーションの向上につながっていることが見取れる。今後『科学的なつながり』（相互の探究発表会や共同研究）の構築に向けてどのような手立てが必要となるかを検討していく必要がある。

### ④ 成果の普及等に関する評価

【研究開発のねらいの実現にあたり、評価項目の内容がおおむね達成されている】

- 広報紙「緑高SSH」の発行・配布活用はSSH事業の理解に有効であり、評価できる。「スタディツアー」に参加した生徒の体験的学びの結果を全校生徒が共有できるような報告書の開示方法や、各種コンテストの募集案内情報の提示方法の工夫等は今後の成果を期待する。
- 開発教材の「探究で使える便利サイト作成」が学内だけの利用に留まらず、学外でも広く利用され、探究活動の支援に活かされることを期待する。

<改善・対応状況>

- 「緑高SSH」は年間6枚を目安に作成している。生徒配付やHP以外にも校内来校者が見られるよう掲示場所を増やした。スタディツアーは体験的学びを全校生徒に共有するため、「アカデミックキャラバン」や「探究成果発表会」で口頭発表を行っている。また、報告書は「緑高ポータル」内に保存する準備を進めている。各種コンテストの募集案内は送付されたポスター等を校内掲示するほか、年度当初に教員による説明会を聞いて、より多くの生徒が興味関心を持つように取り組んでいる。
- 「探究で使える便利サイト集」については、現在「緑の探究」以外でも活用している教科がある。将来的には学外での利用を目指して、校内での活用度をより高める方針で進めている。

### ③ 関係資料

#### ③-1 緑の探究ⅠⅡⅢ 成果物の評価ルーブリック

基準	背景と目的(仮説)【思・判・表】	
A	Bに加えて… 先行研究を引用しながら、これまでに明らかになっていることについて説明している	例:厚生労働省(20XX)によると、日本の人口は2070年には～になるとされる。〇〇をすれば、日本の人口減少を抑制することができると考えられる。本研究は、〇〇の効果の検証を目的とした。
B	自分の研究について、社会的または学術的な意義・価値を示している	例:日本の人口は減少している。〇〇をすれば、日本の人口減少を抑制することができると考えられる。本研究は、〇〇の効果の検証を目的とした。
C	自分の研究について、社会的または学術的な意義・価値を示していない、または不十分で伝わらない	例:私たちは、〇〇に興味をもったので探究した。
D	未提出(未記入)	

基準	方法【知・技】	
A	Bに加えて… 使用したものの数や質量など、必要な情報を記載している	
B	「どの項目についてどうやって検証するのか」を示している	
C	「どの項目についてどうやって検証するのか」を示していない、または不十分で伝わらない	
D	未提出(未記入)	

基準	結果【知・技】	
A	Bに加えて… 結果を図、表、グラフとして適切に示している(適切でない例:グラフの文字が本文に比べて著しく小さい)	
B	「方法」と対応した結果を示している	
C	「方法」と対応した結果を示していない、または不十分で伝わらない	
D	未提出(未記入)	

基準	考察【思・判・表】	
A	Bに加えて… 先行研究を引用しながら、自分が得られた結果と先行研究のデータを比較している	
B	「結果」を引用しつつ、その解釈やその結果が得られた理由について述べている	
C	「結果」から考えられること以外の内容を述べている、または単なる結果の要約である	
D	未提出(未記入)	

基準	結論【思・判・表】	
A	Bに加えて… 今後の展望について述べている	
B	「目的(仮説)」と対応した結論を示している	
C	「目的(仮説)」と対応した結論を示していない、または不十分で伝わらない	
D	未提出(未記入)	

基準	ポスターのレイアウト【知・技】	
A	Bに加えて、次の項目をすべて満たす ・フォントに統一性がある(例:見出しメイリオ、本文ゴシック) ・文字の大きさに統一性がある(例:見出し48pt、本文40pt) ・図表を使用しており、本文などと重ならないようにそれらを配置している	
B	次の項目をすべて満たす ・学校名、グループ番号を正しく記載している ・参考文献を正しく記載している(テキスト参照) ・構成が、概ね「Z型(上段左→右、中段左→右...)」または「逆N型(上段左→中段左→下段左→上段右→中段右...)」になっており、視線の流れを意識したものになっている	
C	Bを満たしていない、または締切を過ぎて提出した	
D	未提出	

基準	声量【知・技】	
A	発表の場であるという意識をもち、はっきりとした聞き取りやすい声量で発表している	
B	聴衆に聞こえる声量で話している	
C	声量が不十分で聞き取れないことがある	
D	未発表	

基準	アイコンタクト【知・技】	
A	発表の場であるという意識をもち、内容に応じて聴衆と適切に目を合わせようとしている	
B	時折前や聴衆を見ながら発表している	
C	前を見て発表していない	
D	未発表	

基準	表現【思・判・表】	
A	発表の場であるという意識をもち、内容が明確に伝わるように説明しているのに加え、ポスターを指し示すなどして十分に活用している	
B	内容がおおむね伝わるように説明している	
C	説明が不十分で内容がほとんど伝わらない	
D	未発表	

「テーマⅠ 学校設定科目「緑の探究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」の設置（仮説Ⅰ）」

③-2 課題研究テキスト

学校ホームページにPDFを掲載している。

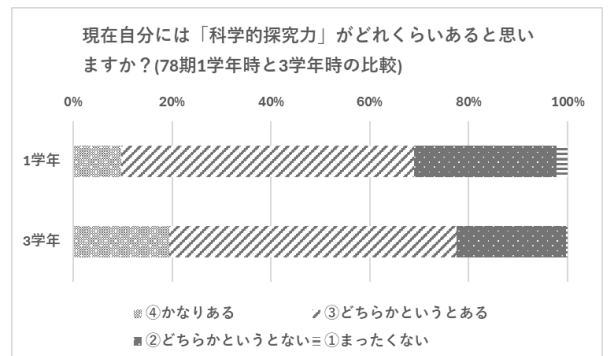
[URL] <https://www.pen-kanagawa.ed.jp/y-midorigaoka-h/tokushoku/ssh.html>



③-3 現在自分には「科学的探究力」がどれくらいありますか？【生徒アンケート】

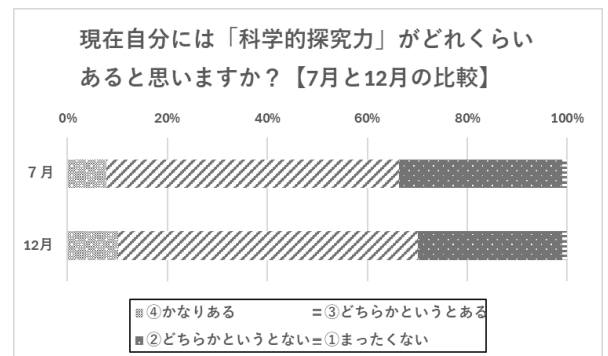
【表1 78期の1学年時と3学年時の比較】

	2023年12月 1学年(212人)	2025年7月 3学年(165人)
④かなりある	9.7%	19.4%
③どちらかというところ	59.3%	58.2%
②どちらかというところない	28.8%	22.0%
①まったくない	2.2%	0.4%



【表2 今年度1, 2学年 7月と12月の比較】

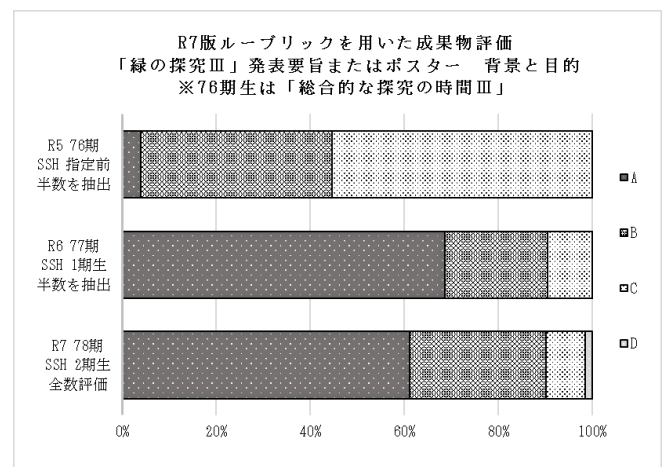
	2025年7月 (342人)	2025年12月 (388人)
④かなりある	7.8%	10.2%
③どちらかというところ	58.6%	59.9%
②どちらかというところない	32.6%	28.9%
①まったくない	1.1%	1.0%



③-4 生徒が3学年時に作成したポスターの「背景・目的」【ルーブリック評価】

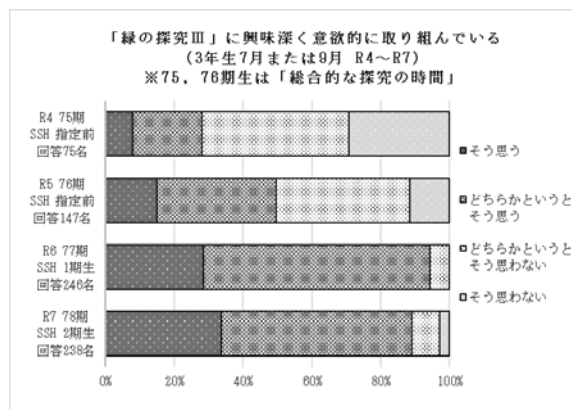
	A	B	C	D
R5 76期(130人) ※半数を抽出	5 (3.8%)	53 (40.8%)	72 (55.4%)	0 (0%)
R6 77期(32人) ※半数を抽出	22 (68.8%)	7 (21.9%)	3 (9.4%)	0 (0%)
R7 78期(72人)	44 (61.1%)	21 (29.2%)	6 (8.3%)	1 (1.4%)

※76、77期はポスターの評価をしておらず、この比較のための調査となり、半数の抽出。



### ③-5 「緑の探究Ⅲ」に興味深く意欲的に取り組んでいる【生徒アンケート】

	そう思う	どちらかという 思う	どちらかという 思わない	そう思わ ない
R4 75期(75人)	8.0%	20.0%	42.7%	29.3%
R5 76期(147人)	15.0%	34.7%	38.8%	11.6%
R6 77期(246人)	28.5%	65.9%	5.7%	0.0%
R7 78期(238人)	33.6%	55.5%	8.0%	2.9%



### ③-6 科学コンテストや外部発表会の成果

R7 2025	実施日	参加人数・件数	受賞歴	新規
日本生物学オリンピック2025	7月13日	5人出場		
第20回科学地理オリンピック	12月13日	3人出場		
第36回日本数学オリンピック	11月16日	8人出場		
第25回日本情報オリンピック	10月12日	3人出場		
科学の甲子園 神奈川県大会	11月23日	8人出場		
横須賀高校探究発表会	7月4日	ポスター発表1件		○
SSH生徒研究発表会	8月6日	ポスター発表1件		
第103回日本生理学会大会	3月10日	ポスター発表1件		○
第21回日本感性工学会春季大会	3月16日	ポスター発表2件		○
第8回高校生サイエンス研究発表会	3月20日	ポスター発表2件	5月まで審査結果待ち	
日本地理学会2026年春季学術大会	3月27日	ポスター発表2件	予定	○

### ③-7 今年度の取組について【職員アンケート】

#### (1) オリジナルテキスト

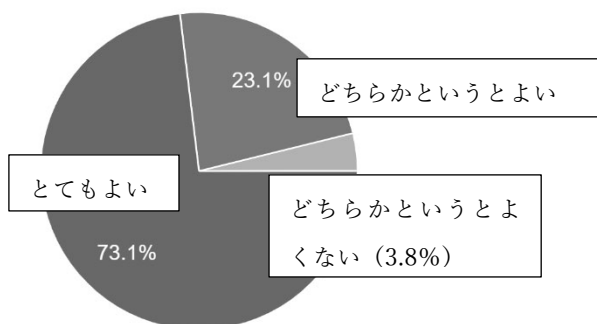


図1 オリジナルテキストの開発(26人)

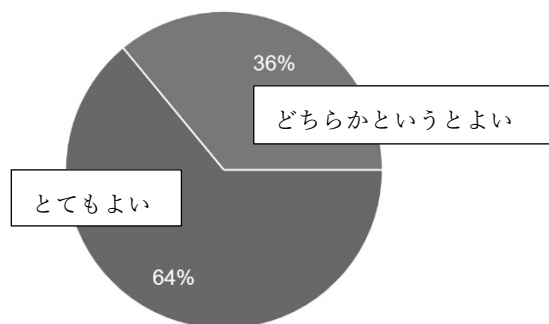


図2 オリジナルテキストの内容(25人)

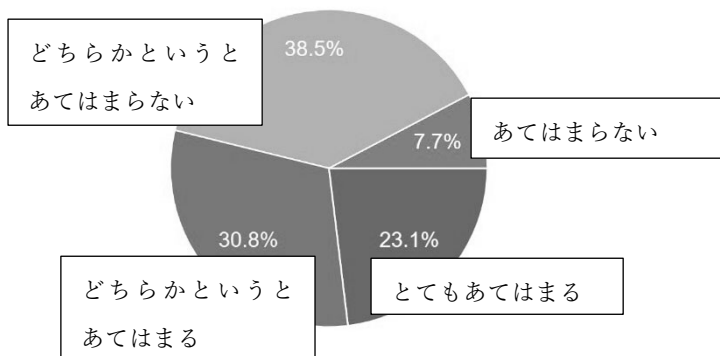


図3 オリジナルテキストを「緑の探究」で(担当の指示を自分なりに補足して)活用しましたか(26人)

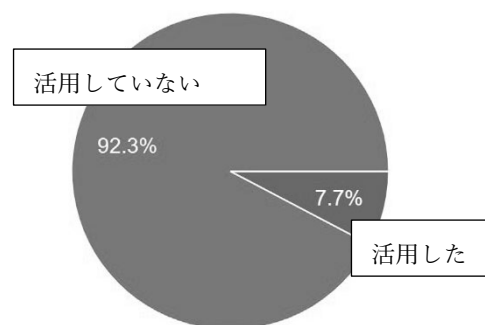


図4 オリジナルテキストを「緑の探究」以外で活用しましたか(26人)

### 「オリジナルテキスト」について自由記述（抜粋）

- ・ 非常にいいと思います。だからこそ職員がもっと目にしてほしい。オリジナルテキストなのでより身近になるような内容にどんどんブラッシュアップしてほしいです。
- ・ 様々な情報が詰まっていると思いますが、生徒がオリジナルテキストを見ているのかは微妙な気がしました。職員側がどう活用するかが大事になってくると思います。もっと活用できたら良かったと思っています。

### (2) 外部講師

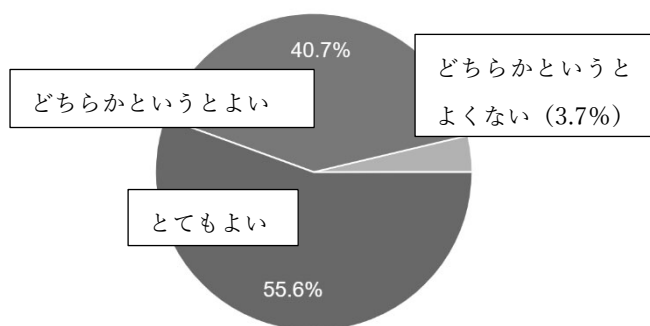


図5 実施時期(27人)

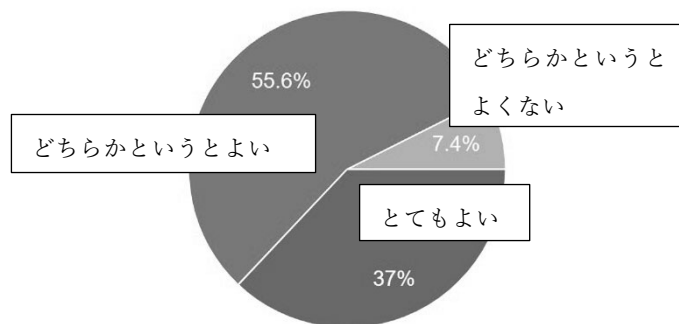


図6 講義の内容(27人)

### 「外部講師による講義」について自由記述（抜粋）

- ・ 「探究」の考え方や進め方に正解がないので一つの意見として聞く分にはよかった
- ・ 科学の方法論や科学哲学、学問論を平易に示してくれる講師選定が良い。
- ・ 生徒が自分事としてとらえることができていないのが現実。

### (3) 授業計画

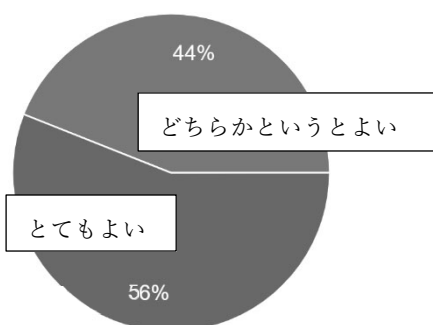


図7 授業計画の変更について(25人)

### 「授業計画」について自由記述欄（抜粋）

- ・ 1学年の担当クラスでは予備実験までは試行錯誤して頑張っているようでした。その先は時間内に終わらせるために動いているようでした。もちろんよいものを作ろうとしていましたが、学びを深めるよりも「ポスターを作りきる」に主軸が置かれてしまったように感じています。もっと、予備実験をして方向転換をする班が多くてよいと思います。そしてその場合は実験が期間内にできなくても、自分たちが目指すものは何なのか、どう設定したら手の届く範囲で実践できるだろうかと考え抜く方が学びが深まると思いました。実験については用具にもれがないかなどのチェックが主になってしまいます。外部の方にロジックチェックをしてもらえるともよい探究になると感じました。
- ・ “生徒がじっくり研究に向き合える”時間となっていた。生徒からの「時間が足りない」という声も聞かなくなった。

#### (4) 学年発表

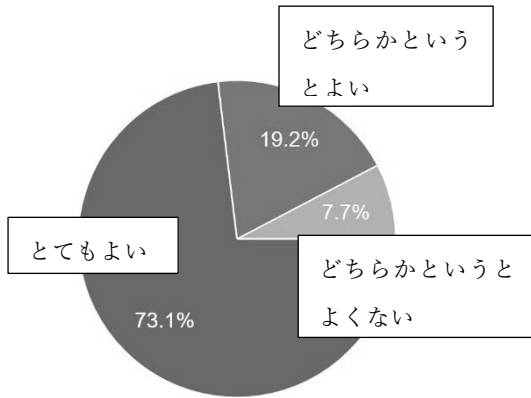


図8 学年発表の変更について(26人)

「学年発表」について自由記述欄（抜粋）

- ・ 生徒が他者の探究について触れる機会になり次年度以降のモチベーションにもなると思う。寒い会場なので、服装については目をつぶり、とにかく寒くない格好で臨んだほうが発表に集中できるのではないかと思います。
- ・ アカデミックな雰囲気が形成され、SSH の発表としてふさわしいポスターセッションになっていたと思います。
- ・ 保護者の方は普段こんなことを学校でやっていたすごいという声が多かったのでより多くの保護者の方に来てもらえたら良いなと思いました。

#### (5) 担当者会議

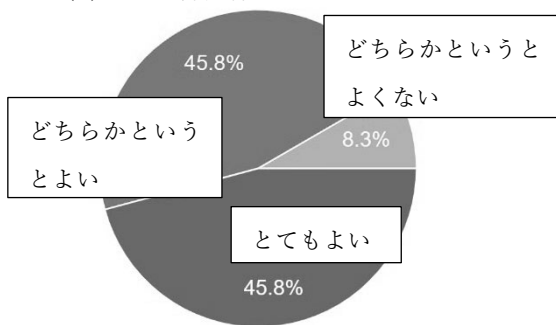


図9 担当者会議について(24人)

「担当者会議」について自由記述欄（抜粋）

- ・ 研究 G の担当だけでなく、授業者で参画する雰囲気を少しは作れたと思う。

### ③-8 今年度の取組について【外部連携団体アンケート】

#### 評価できる点

- ・ 限られた時間の中で実施する取り組みですが、年々レベルは上がっていると思います。今年度は大きなポスターを作製したので、離れた位置からでも見やすくなりました。また、ポスターの掲出場所を体育館に集約したので見て回るのが楽になりました。Google Classroom にファイルを上げてもらうことで、アドバイザー側も随時進捗を確認することができました。
- ・ 夏休み明けに実施した各班の探究計画についてのアドバイスをを行う時間が設けられていたことが良かった。アドバイザーからの指導も生徒たちからの質問もお互いにしやすい形式だった。
- ・ 生徒さんが意識が高く探究に取り組んでいた。ポスター発表での生徒さん同士の雰囲気として、科学的であるべきという意識があるように思われました。

#### 課題

- ・ 実験段階が classroom でのやりとりのみだったため、生徒からの質問がない場合にどの程度こちらから口を挟むべきかが難しかった。「良い実験結果を出す」ことが探究の目的ではないため、今年度に関してはよほど修正がきかない間違い以外は特に指摘はしなかった。
- ・ 全生徒が満足度 100%は理想ですが、私が見てきた限りでは「課題」となるものは感じていません。

#### その他

- ・ 非常に有益な取り組みとしますので、SSH 指定が終了した後も継続されると良いなと思います。
- ・ 記録に使用している探究ノートについて、班によって記載の詳細度が異なっていたため、後で見返して分かる程度に統一して記載した方が良かったのではないかと感じた。
- ・ テーマが重複したときに、生徒さんたちや先生方が困っていたのでしたら、調整（どちらかを別テーマに変更）や分担（同テーマで、視点や作業を分担）などの対応もあり得そうです。しかしそのようなことをせずに、生徒さんが多様に考慮することを束縛しないことを重視するのも良さそうです。

③-9 令和6年度授業力向上における取組

教科	①『発信力』について、各教科でどんな力を身につけさせたいのか(教科における『発信力』が高い生徒とはどんな生徒か)			②その授業のために、「探究的な学習」を効果的に取り入れた方法	第1回授業評価を踏まえた
	A (あてはまる)	B (まあまああてはまる)	C (あてはまらない)		課題
国語	文章の内容・構成等を的確に分析し、相手や場面に配慮しつつ自分の考えを論理的に展開することができる。	文章の内容・構成等をおおむね読み取り、相手を意識しつつ、自分の考えを展開することができる。	文章の内容・構成等を読み取れず、自分の考えを展開できない。	文章の読解・分析にあたっては、互いの考えを伝えあう等、協働的な学びを行う。 複数の資料から内容の共通点・相違点を考察させ、発表させる。 社会問題について客観的データをもとに考察させ、その解決方法を論じさせる。	項目3が比較的高い割には、項目6が低い傾向にある。 1・2年生はほぼ〇状になっているので、課題が見えづらいが、これに対して3年生は項目によってばらつきがあるので改善できそうである。
社会 (地理歴史) (公民)	地理・歴史・公民に関する諸事象について、複数の資料の関係や異同に注目してまとめた内容を、グラフ・史料などによる根拠を示しながら、他者に多角的・多面的に伝えることができる。	地理・歴史・公民に関する諸事象について、資料からまとめた内容をグラフ・史料などによる根拠を示しながら、他者に伝えることができる。	地理・歴史・公民に関する諸事象について、資料からまとめた内容を他者に伝えるためのグラフ・史料などによる根拠が十分でない。	絵画や写真・年表・グラフ・実物教材など、生徒が比較的取り組みやすい教材を用い、そこから分かる事柄や事象を読み解き、疑問点や新たな発見を見出させることで、生徒の問いを導き出す。	1年生、2年生の数値が全体的に3年生の数値より低くなっている。特に項目4「できるようになった実感」が3年生よりも低い。
数学	数学的な表現を用いて事象を簡潔・明瞭・的確に表現し、他者に伝えることができる。	数学的な表現を用いて事象を表現し、他者に伝えることができる。	数学的な表現を用いて事象を表現し、他者に伝えることができていない。	グループワークやペアワークにおいて、解答の作成や考察を行い、共有する。	・項目2「単元の学習の中で、他者の考えを知り、自らの考えを広げ深める機会がある」の評価が低い。 ・項目10「教科の学びにおいて「発信力」が身についたと感じる」の評価が低い。(3学年を除く)
理科	考察やまとめを、根拠やデータに基づいて自分の言葉で表現したり発表したりできる。	考察やまとめを、自分の言葉で表現したり発表したりできる。	考察やまとめを、自分の言葉で表現したり発表したりすることが十分にできない。	実験を行ったり、レポート形式の課題を与えたりして、根拠やデータを基にした考察やまとめを行わせる。	今年の目標である発信力の項目が低い傾向にある。
保健体育	運動や健康についての自他や社会の課題に対し、解決に向けて、客観的な根拠を用いて論理的にわかりやすく、具体的に自分の考えを他者に伝えることができる。	運動や健康についての自他や社会の課題に対し、解決に向けて、具体的に自分の考えを他者に伝えることができる。	運動や健康についての自他や社会の課題に対し、解決に向けて、具体的に自分の考えを他者に伝えることができていない。	個人の知見を広げるほか、グループワーク等の情報交換や相互の観察、技能の動画解析、データや資料の読み取りにより、課題発見・解決のプロセスを形成する。	保健の項目4や10が低い。発信することで知識として身についたことが自覚できたり、発信できたという実感が生まれることもある。
外国語(英語)	自身の考えや意見を論理的な構成で順序立て、適切な表現や根拠を用いて他者に分かりやすく伝えることができる。	自身の考えや意見を論理的な構成でまとめられ、概ね他者に伝えることができる。	自身の考えや意見が論理的ではなく、他者に分かりやすく伝えることができない。	プレゼン、スピーチ、ディベート、エッセイライティングなどの活動を通して、情報を精査、考察させ、場面や状況に応じて用い、相手に説得力をもって伝えられる適切な表現力を形成する。	時期的にまだ発表タスクを授業で実施していないためと考えられるが、英語コミュニケーション、論表の問10が他に比べてやや低い。併せて、論評の問8、9の値も低い。
家庭科	家庭や地域、社会における生活の中の課題に対し、解決に向けて思考し、根拠に基づいて論理的に表現することができる。	家庭や地域、社会における生活の中の課題に対し、解決に向けて思考したことを表現することができる。	家庭や地域、社会における生活の中の課題に対し、解決に向けて思考したことを表現することができていない。	実習や観察・実験、調査等を通して課題の解決に向けて実践し考察したことを発表し合い、他者からの意見を踏まえて改善策を検討する機会を作る。	身についたことやできるようになったこと、発信力についての項目が他に比べて低い。
情報	数学的・物理的な現象を言語化し相手に伝えることができ、適切な図を用いて表現できる。さらに図を用いてプログラミングをすることができる。	数学的・物理的な現象を言語化し相手に伝えることができ、適切な図を用いて表現できる。	数学的・物理的な現象を言語化し相手に伝えることができる。	例題や練習問題を取り組む段階から、言語化、図式化、プログラミングを意識させペアもしくはグループで発言する場を設ける。	知識理解的な内容が主であった前期は発信力の向上につなげる内容が少なかった。 1単位で多クラスなので評価材料を集めることが困難で、思い切った実習評価が困難である。

第1回授業評価を踏まえた		教科による振り返り (①生徒側からの「生徒による授業評価」②教員側からの5月に決めた「ルーブリック評価」を踏まえて記入)	<参考> 科学的思考力(探究力)の高まりについての教員側の評価(今年度は「発信力」)
改善策	「発信力」を身につけさせるために		
解決方法を考えさせる手立てをより明示的にする。 国語表現は項目4を意識させる。	内容・構成等を的確に分析し、相手や場面に配慮しつつ自分の考えを発信できるように指導する。	①項目10において、第2回の方が少しではあるが数値が高くなっており、生徒が「発信力」を発揮できる機会を意識的に設けられたことが窺える。しかし、項目7において、授業で身に付けた力を発揮できていると感じている生徒が減っているため、学びを生かした発信の機会を設ける必要がある。 ②ルーブリックを生徒に提示するのが遅く、意識した学習活動を展開することができていない。教科の中で基準や方法、ルーブリックの位置づけを再度見直す必要がある。	[10月]<1学年>【文章の内容や構成等を分析し、相手に的確に伝える】 A:12%、B:79%、C:9%
・生徒が主体的に参加する議論・発表などの講義以外の学習活動をより充実させる。 ・学習のねらいを示したり、振り返ったりする活動をより充実させ、生徒が学習の効果をより実感できるようにする。	・生徒が主体的に参加する議論・発表などの講義以外の学習活動をより充実させる。	①10項目全てにおいて第2回の方が数値が高くなっており、授業改善の取組の成果を見取ることができた。一方で78期(2年)の数値は昨年(1年時)より低くなっており、探究科目でより一層改善を進めていく必要がある。 ②課題の設定と評価のあり方が難しく、今後より適切な方法や基準を検討していく必要がある。	[11月]<2学年>【世界史で扱う日本史についての課題】 A:0%、B:87%、C:13%
・グループワークでそれぞれ別の問題演習を行い、自分の解いた問題を残りのグループメンバーに発表する場を設定する。 ・問題演習や公式の成り立ちなどの場面でスライドなどを用いた発表の場を設定する。 ・端末を用いて共有、発信する機会を設定する。	左記、改善策と同様	①すべての項目において、第2回の方が数値が高くなった。しかし、各学年の比較においては項目5と項目10を中心に数値が下がっている。授業内容の難化とともに講義型授業となっていることが原因かと思われる。 ②課題の設定と評価のあり方が難しく、今後より適切な方法や基準を検討していく必要がある。	[10月]<1学年>【三角形の性質】 A:20%、B:75%、C:5%
・理科では、話すだけでなくレポートを根拠やデータをもとにして相手に分かりやすくまとめる力も発信力と考えている。その考え方が伝わっていない生徒が多いと考えられるので、まずそのことを伝えて意識付けする。 ・物理の授業では、生徒が予習で資料を作り、その資料をもとに他の生徒に説明をするようなゼミ形式の授業を行ってみたい。	左と同じ。	①10個の質問について、第2回目の結果は第1回に比べて高くなっている。また、令和5年度の2回目と比較しても、ほとんどの項目で数値が上がっている。ここ2年間での指導はある程度うまくいったと考えられる。 ②物理、物理基礎については、来年度も同じ課題を与え、よりAが増えるように指導していく。	[物理 第1回]<3学年> 【ペットボトルロケット】 A:63%、B:21%、C:16%  [物理基礎 第1回]<2学年> 【シャトルランのモデル化】 A:45%、B:43%、C:12%
時間の確保や学年での共有は必要となるが、生徒が発表の準備をして成果物をつくる取組みややってみる価値はあるかもしれない。	何気ない対話でも発信力を身につけられるため、生徒同士のコミュニケーションを重視した授業の展開。 保健体育の「発信力」を今一度生徒と共有する。	「生徒による授業評価」は、10項目すべてにおいて第1回より第2回の方が平均が高くなった。 「ルーブリック評価」は、1学年では5月実施時よりも12月実施時の方がCの割合が減り、Aの割合が増えた。2学年では、この学年の生徒が1学年時の頃と比較したところ、Cの割合が減り、Aの割合が増えた。	[5月]<1学年>【レポート】 A:8.6%、B:63.6%、C:27.9% [12月]<1学年>【レポート】 A:17.0%、B:60.9%、C:22.1% [1月]<2学年>【スライド発表】 A:21.9%、B:73.3%、C:4.8%  《参考》[R5 12月]<1学年>【レポート】 A:13.4%、B:75.0%、C:11.6%
評価をあげるためには、文法を扱いながら、ある程度長めの文章を扱う必要があると考えられる。発表タスクを年間を通して計画的にやりたいという意見がある反面、後期に発表、ディベートを活動計画に入れているので、前期よりも後期の数値が高まることを目指せばよいので問題はない。	内容・構成・場面等を的確に分析し、自分の意見を論理的に発信できるように指導する。	発表自体は適切にできていても、自信を持つての発信ができていないようである。 十分な準備期間を設けて、リサーチや練習を重ねることで、A評価に近づけていきたい。	[9~10月]<3学年>【緑の探究英語発表】 A:18%、B:82%、C:0%
実技実習の後に身についた力を試す課題を設定する。 課題を理解させ、伝えたい内容の整理ができるよう時間を確保し、特定の生徒のみでなくバランスよく発表できる機会をつくる。また、発表以外の形式で他者に伝えるための方法を指導する。	先と同様	①項目③④については、若干低くなっているが、アンケートの実施時期が実習前であったこと、単元の途中であったことも原因と考えられる。他項目は高くなっているが、スケジュールも含めて実施内容を検討していく必要がある。 ②自分で設定した課題に対して、実施内容はよくまとめられているが、考察や今後の課題などの内容が薄い。年度当初に評価基準を示しているが、年度末に意識して取り組んでいる生徒が少ないように感じる。定期的に確認することが必須である。	[実施時期]<学年>【ホームプロジェクト前期】 A:14.2%、B:84.4%、C:1.4%  [実施時期]<学年>【ホームプロジェクト後期】 A:9.3%、B:89.3%、C:1.4%
生徒の満足感や、内容理解度を深めるための仕掛けは必要である。常に周りと相談できるようなレイアウトを提案していきたい。	グループ内での発表を多く持つことで、自分の考えを共有し発信力を高めたい。	週1単位の授業展開で3年目、継続的な授業展開の難しさを痛感している。特に、共通テスト必須化に伴い知識理解に係る単元、プログラミングやデータ分析など実習に多くの時間を割く単元など、必須事項を終えるだけで終わってしまった。	[実施時期]<学年>【LaTeX】 A:20%、B:69%、C:11%

③-10 令和7年度 生徒による授業評価（第1回：7月実施（n=6289）,第2回：11月実施(n=5167)）

質問項目（仮説2について検証の指標としている5つの質問）

質問① 単元（内容のまとめり）の学習の中で、課題について自分の考えをまとめたり、解決方法について考える場面がある

質問② 授業で得た知識をもとに、自分の考えをまとめたり、課題の解決方法を考えたりすることができた

質問③ 教科の学びにおいて「観察力」が身についたと感じる

質問④ 教科の学びにおいて「分析力」が身についたと感じる

質問⑤ 教科の学びにおいて「発信力」が身についたと感じる

	質問①		質問②		質問③		質問④		質問⑤	
	第1回	第2回	第1回	第2回	第1回	第2回	第1回	第2回	第1回	第2回
かなりあてはまる	2395	2126	2057	1943	1800	1752	2032	1914	1627	1531
ほぼあてはまる	3253	2607	3533	2803	3454	2868	3508	2778	3147	2649
あまりあてはまらない	570	391	616	378	917	511	677	446	1302	883
ほとんどあてはまらない	71	43	83	43	118	36	72	29	213	104
平均値※	3.27	3.32	3.20	3.29	3.10	3.23	3.19	3.27	2.98	3.09
2回目の調査結果の増減	+0.05		+0.08		+0.12		+0.08		+0.1	
上位2つの評価の割合	89.81%	91.60%	88.89%	91.85%	83.54%	89.41%	88.09%	90.81%	75.91%	80.90%
2回目の調査結果の増減	+1.79ポイント		+2.97ポイント		+5.87ポイント		+2.72ポイント		+4.99ポイント	

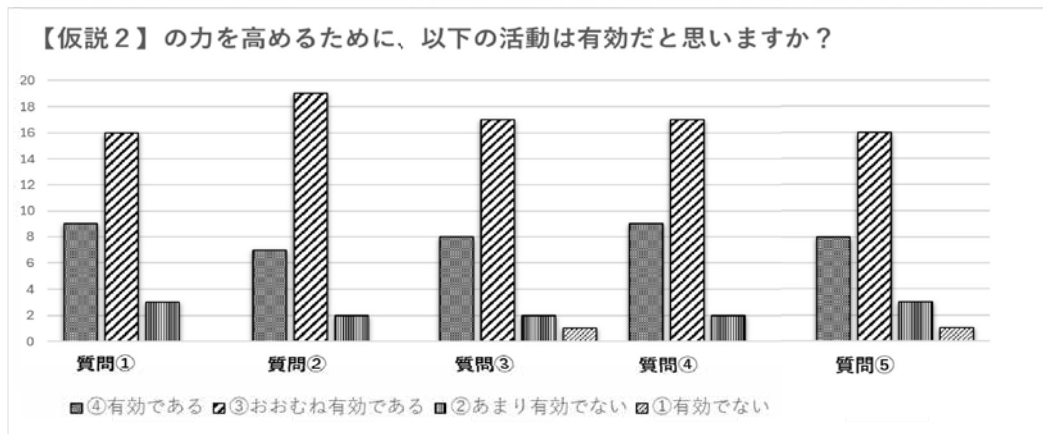
※かなりあてはまるを4点～ほとんどあてはまらないを1点として算出

参考 過去3年間の結果

	質問①		質問②		質問③		質問④		質問⑤	
	第1回	第2回	第1回	第2回	第1回	第2回	第1回	第2回	第1回	第2回
令和4年度(テーマ:観察力)平均値	3.25	3.35	3.16	3.28	3.10	3.25	3.00	3.14	3.06	3.12
2回目の調査結果の増減	+0.1		+0.12		+0.15		+0.14		+0.06	
令和5年度(テーマ:分析力)平均値	3.29	3.33	3.21	3.26	3.17	3.21	3.16	3.23	3.05	3.15
2回目の調査結果の増減	+0.04		+0.05		+0.04		+0.07		+0.1	
令和6年度(テーマ:発信力)平均値	3.27	3.33	3.19	3.27	3.15	3.24	3.17	3.26	3.02	3.16
2回目の調査結果の増減	+0.06		+0.08		+0.09		+0.09		+0.14	

③-11 令和7年度教員対象アンケートより、仮説2に関する質問を抜粋 (n=28)

質問項目	有効である	おおむね有効である	あまり有効でない	有効でない	有効・おおむね有効と答えた割合
質問① 【仮説2】の力を高めるために、以下の活動は有効だと思いますか？ [「『科学的思考力』育成」の実現に向けて、それを年度ごとに「観察力」「分析力」「発信力」に細分化する取り組み【今年度は各教科でテーマを1つ選択】]	9	16	3	0	89%
質問② 【仮説2】の力を高めるために、以下の活動は有効だと思いますか？ [5月：今年度の教科の目標・計画を決める教科会【①「(今年度の)教科・科目として育成すべき資質・能力」②「その授業のために、「探究的な学習」を効果的に取り入れた方法」→各教科入力後、全体共有】]	7	19	2	0	93%
質問③ 【仮説2】の力を高めるために、以下の活動は有効だと思いますか？ [7月：「第1回生徒による授業評価」【実施後に「課題・改善策」を教科共有。その後、全体共有】]	8	17	2	1	89%
質問④ 【仮説2】の力を高めるために、以下の活動は有効だと思いますか？ [10月 公開研究授業及び分科会・全体会]	9	17	2	0	93%
質問⑤ 【仮説2】の力を高めるために、以下の活動は有効だと思いますか？ [11月「第2回生徒による授業評価」【第1回との比較】]	8	16	3	1	86%



【教員向けアンケートに寄せられた意見】

○回答の具体的な理由

- ・このようなテーマ設定がされることで、教科学習においても探究的な視点をもって授業づくりをするようになった
- ・さまざまな授業で探究的な学習を行うことができた結果として探究の授業にて成果が出たと感じたから。
- ・検証が不確か。
- ・今年度しか見ておらず、比較対象がないですが、前向きに取り組んでいる様子が見受けられたため。
- ・実際に行った生のデータがあり、それを共有して真似や改善をすることで、教員は授業の腕を、生徒は科学的探究力を高められると感じたため。
- ・授業を作る時や振り返るときに意識することができるから。
- ・授業評価に関しては、個人で改善できる反省点はあったもののあまり教科全体でこのようにしていこうという気概はなかったから。
- ・授業評価を「④有効である」とした理由は、教員目線で「科学的探究力」を高めるために優れている授業と、生徒目線でのそれが、かみ合っているかどうかを確認することができるのが、生徒からのフィードバックである授業評価だからです。
- ・活動の手順が系統化されているから。
- ・第1回の授業評価で課題設定をした後、第2回との比較に至るまでの授業期間が2ヶ月ほどしかないため、年間の取組としてどの程度有効な結果が得られるか、難しい部分も感じています。
- ・定期的に振り返る機会があることで、通年で能力の育成を意識した授業をすることができた。

○仮説2に関する取り組みの改善点について

- ・「探究的な学び」と、そうでない学びの違いが具体的によく分からない。
- ・成果を数値、データとして残す表すということに違和感や無理を感じる

テーマⅢ. 「横浜」の地域資源や外部機関等との連携を活かした取組の充実（仮説3）

③-12 『「科学的思考力」「課題発見・設定能力」「課題解決能力」からなる「科学的探究力」や「協働力」の育成について各学年の「緑の探究」は有効であると思いますか』【職員アンケート】

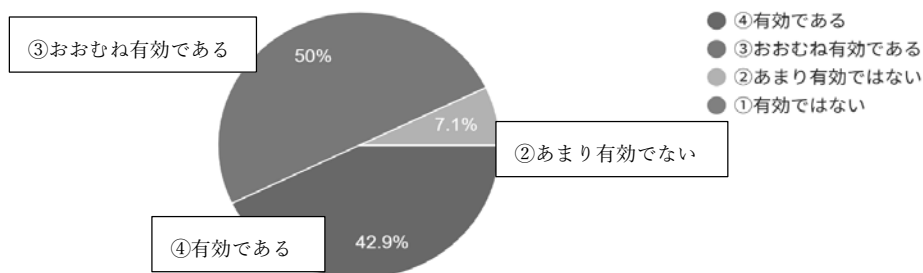


図1 『「科学的思考力」「課題発見・設定能力」「課題解決能力」からなる「科学的探究力」や「協働力」の育成について「緑の探究Ⅰ」は有効であると思いますか』(14人)

(原文一部抜粋)

- ・実験がうまくいかない場面からも「なぜ」が生まれているように感じたため。その疑問がまた次の実験に繋がったり、理解を深める要因になっていると思う。
- ・水に関わるものという縛りを入れることで、課題発見能力が鍛えられる。また、数学で統計学の初歩を学ぶが、それを学ぶ時期と結果を分析する時期が近いため、学習効果が高いと思われるため。
- ・科学的探究力においては、極少数の例を除いて、教職員側で研究の体裁を整えなければ決して向上しない能力と言える。したがって、研究を前提とした授業は生徒の科学的探究力を向上させる一役を担っている。  
ただし、協働力においては、研究の負担が一部の生徒に偏っていることから、決して上手くいっているとは思われない。研究は個人の能力に左右されるので仕方のないことだが、授業時の作業を観察していると、作業しているものと作業していないものの差が見られる。

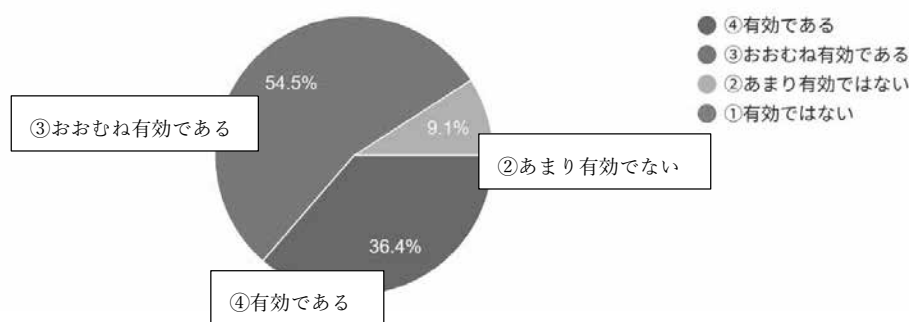


図2 『「科学的思考力」「課題発見・設定能力」「課題解決能力」からなる「科学的探究力」や「協働力」の育成について「緑の探究Ⅱ」は有効であると思いますか』(11人)

(原文一部抜粋)

- ・班で実験や分析を行っていて、その体験自体が能力の向上につながっていると思う。
- ・生徒の取組み状況に差があり、温度差が生じている場面も見受けられる
- ・テーマが水という縛りから、自由ということで育む力のステップアップがスムーズ。理科や数学においても、グラフや統計的な要素の学びも2年次ではさらに深まるため、横断間の学びとしてよい。ただし、研究テーマによってはその恩恵が難しいものもあるかもしれない…。
- ・探究を通してグループ内の仲間と協働し、活動を行うことで求められている力を育むことができると思うから

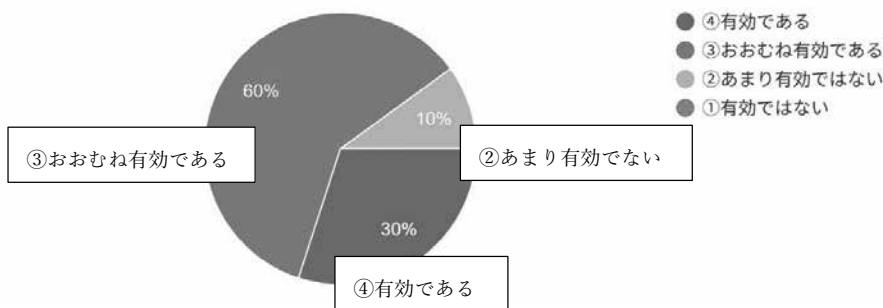


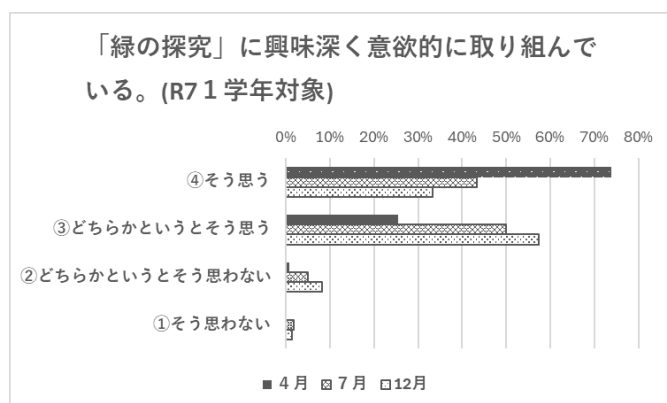
図3 『「科学的思考力」「課題発見・設定能力」「課題解決能力」からなる「科学的探究力」や「協働力」の育成について「緑の探究Ⅲ」は有効であると思いますか』(10人)

(原文一部抜粋)

- ・1,2年生での取り組みを基盤に、自分たちでテーマ設定から始め、仮説を立て、実験によって検証し、結果を考察する。この一連の流れを生徒が理解し取り組んでいる様子から、【仮説1】で挙げられている力を育むために、「緑の探究Ⅲ」は有効であると考えられる。
- ・プレゼンの組み立て方、思考のプロセス、発信力等に変化のみられる生徒が増えたから。
- ・意欲的に取り組んでいる生徒が学びの手ごたえを感じている印象があるから。

③-13 「緑の探究」に興味深く意欲的に取り組んでいる。【生徒アンケート(1学年)】

	4月 (248人)	7月 (164人)	12月 (235人)
④そう思う	73.8%	43.3%	33.2%
③どちらかというと思う	25.4%	50.0%	57.4%
②どちらかというと思わない	0.8%	4.9%	8.1%
①そう思わない	0.0%	1.8%	1.3%



③-14 これまでの「緑の探究Ⅰ」外部協力機関

大学・研究機関・企業等	R4	R5	R6	R7
国立研究開発法人 水産研究・教育機構	●			
ウォータースタンド 株式会社	●			
独立行政法人 国際協力機構 横浜 センター	●			
株式会社オオスミ	●	●	●	●
中外製薬株式会社		●		
日本大学生物資源学部		●	●	●
神奈川県立衛生研究所			●	●
横浜薬科大学				●
海洋研究開発機構 (JAMSTEC)				●
計	4	3	3	5

テーマⅣ. 未来の担い手の育成に向けた国際性を育む取組の充実（仮説3）

③-15 GTEC 平均点【ベネッセ Compass より】

1280 点満点	3 年	2 年	1 年
2023 年 5 月	997.8(269)	950.8(273)	914.8(275)
2024 年 8 月	1064.2(240)	995.6(223)	948.8(238)
2025 年 8 月	1046.6(175)	984.7(213)	940.8(234)

( )は受験者数

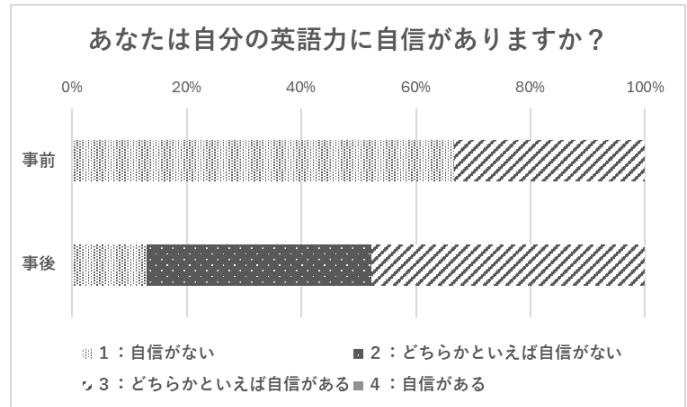
<2025 年 8 月 3 年内訳>

	人数	平均スコア	CEFR-J
ライティング	175	234.2	B1.1
スピーキング	175	258.2	A2.2

CEFR-J	英語力プロフィール
B1.1	海外進学を視野に入れることができるレベル
A2.2	海外の高校の授業に参加できるレベル
A2.1	海外ホームステイや語学研修で楽しめるレベル

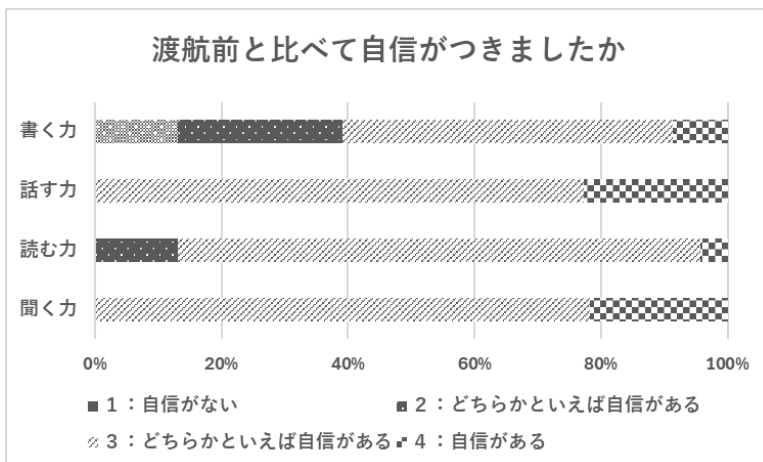
③-16 あなたは自分の英語力に自信がありますか【ニューズ-ランド 海外研修事前事後アンケート】

あなたは自分の英語力に自信がありますか？	事前 (27人)	事後 (23人)
1：自信がない	66.7%	13.0%
2：どちらかといえば自信がない	0.0%	39.1%
3：どちらかといえば自信がある	33.3%	47.8%
4：自信がある	0.0%	0.0%



③-17 渡航前と比べて自信がつけましたか【ニューズ-ランド 海外研修事前事後アンケート】

回答23人	聞く力	読む力	話す力	書く力
1：自信がない	0.0%	0.0%	0.0%	13.0%
2：どちらかといえば自信がない	0.0%	13.0%	0.0%	26.1%
3：どちらかといえば自信がある	78.3%	82.6%	73.9%	52.2%
4：自信がある	21.7%	4.3%	21.7%	8.7%



③ - 18 令和6年度第2回運営指導委員会 議事録【令和7年3月17日】

運営指導委員

委員長	立川 仁典	横浜市立大学 理学部 教授
副委員長	伊藤 一成	青山学院大学 社会情報学部 教授
委員	菊地 あづさ	横浜国立大学 理工学府 准教授
委員	苫野 一徳	熊本大学 教育学部 准教授
委員	宮野 公樹	京都大学 学際融合教育研究推進センター 准教授
委員	山崎 洋一	神奈川工科大学 創造工学部 准教授

神奈川県教育委員会教育局高校教育課

渡貫 由季子（高校教育課長） 横谷 英海（専任主幹兼指導主事） 比良 剛（指導主事）

横浜緑ヶ丘高等学校

坂元 久美子（校長）、村井 仁史（副校長）、高木 祥子（教頭）、澤出 由紀子（事務長）、吉村 憲二（総括教諭）、石野 弘明（教諭）、伊藤 理沙（教諭）、近藤 友里子（教諭）、笹野 凜（教諭）、下司 耕輔（教諭）、花田あゆみ（教諭）、保田 直樹（教諭）、SSH研究推進委員会の生徒2名

1 SSH中間評価について

● 中間評価の結果と対応策について

山崎委員：司書の専門性を活かす具体的な取り組みについて、どのようなことを期待しているのか。

学校：電子図書館を導入し、生徒のポスターやスライドを掲載し、在校生がいつでも見られるようにしている。司書と情報教諭が連携し、探究に活用できるサイトを作成済み。活用促進と学外普及を目指す。司書は教員の何倍もリファレンス能力が高く、探究学習の計画段階から関わることで、興味深い展開が可能になる。来年度に向けて体制づくりを進めたい。

菊地委員：スタディツアー参加生徒の感想共有はどのようにしているか。

学校：報告書を作成し、各クラスに配置。また、事後学習として探究成果発表会などで発表の機会を設けている。生徒の言葉でPRすることで、次年度の生徒への触発を狙う。

菊池委員：スタディツアー後の発表はモチベーションが下がる生徒もいるため、来年度以降は発表をセットにした募集をするなど工夫が必要。

伊藤委員：探究の便利サイトについて、教員があらかじめトピックを作っているのか、生徒が自由に編集・追加できるのか。

学校：文献の探し方、アクセス方法、調査の方法など、補助的なツールとして整備を進めている。

伊藤委員：補助ツールも必要だが、生徒が主体となって作る便利サイトのようなものを併用することを今後検討してはどうか。

● 中間評価の具体的な内容と課題

苫野委員：中間評価の結果を率直にどう受け止めたか（妥当か、もっと良い評価でもよかったか）。

学校：6段階評価中の4番目であり、多くの学校が位置する評価。内容を見ると、短期間でSSHを立ち上げ、多くの教員がアイデアを出し合い、否定せずに進めてきた結果、「評価できる」や「期待する」が多く、一定の成果があったと受け止めている。4・5年目はこれを持続可能にするための整備を進める。

苫野委員：評価コメントにある「大学や企業との連携について、連携先等支援を求める探究活動との間で不整合が起らないよう組織的な取組のシステム改善等を期待する」という記述の具体的な指摘内容を尋ねる。

学校：今年度の1年生の研究で、生徒がテーマを自由に設定できるようにした（昨年の生徒からの提案による改善）。その結果、企業側から提供されたミッションに対する研究ではなくなり、生徒が考えた課題と企業の専門性とのミスマッチ（不整合）が生じた。企業は専門性を生かした助言をしたいが、生徒は初歩的な質問をしてくる点が課題となった。

苫野委員：生徒の学びにとっては、より良い企業・大学との関わり方になったのではないか。

2 今年度のこれまでの取組の成果と課題

● 生徒SSH研究推進委員からの報告（1年生1名、2年生1名）

生徒：「世界的に雨が降らず大変な地域がある中で、人工的に雲は作れるのかどうか」を研究した。水槽内で加湿器からの水蒸気をドライアイスで冷やし、クラウドシーディング実験を試みた。雲の発生による光の遮蔽度合いを照度計で測定したり、吸水性ポットに水を撒いた後の質量比較など、具体的な数値で評価を試みた。

SSH研究推進委員の活動としては、かながわ探究フォーラム（神奈川県主催）への参加、縦割り企画の運営、小学校での活動支援、地域との関わりを意識した活動を実施した。また、地域との関わりが増え、定量的評価も意識しながら活動を計画している。

苫野委員：具体的な手順をうまく踏めており、探究のレベルが上がっている証拠。最初の課題から深掘りされ、より高いレベルの問いが見えてきたことが素晴らしい。

● 今年度のこれまでの取組の成果と課題

立川委員：探究について、最終的に生徒が自分で考えて主体的にテーマを選んだという認識でよいか。

学校：生徒自ら決めている。「自分がやっていて苦しいテーマだとしんどくなる」ことを伝え、関心があることをテーマにすることを継続して指導している。昨年度と比べテーマが多彩になったのは、生徒の意識が変わってきたからではないか。

立川委員：評価できる点が多く、もう少し評価が高くてよかったのではと感じた。

苫野委員：生徒発信の活動が増え、先生方が委ねていく姿勢が浸透していると感じた。研究グループの取り組みも興味深い。

伊藤委員：この成果を4年目、5年目と改善点を探りながら進めていってほしい。

苫野委員：先生方の経験が蓄積されていること、3年生が後輩のイベントを作り始めていることに頼もしさを感じた。

菊池委員：アンケートで「発信力」の数値が上がったとのことだが、生徒自身が「発信力」をどう捉えているかという自由記述式のアンケートも同時に行うと良いだろう。

### ③-19 令和7年度第1回運営指導委員会 議事録【令和7年10月2日】

#### 運営指導委員

委員長	立川 仁典	横浜市立大学 理学部 教授
委員	菊地 あづさ	横浜国立大学 理工学府 准教授
委員	苫野 一徳	熊本大学 教育学部 准教授
委員	宮野 公樹	京都大学 学際融合教育研究推進センター 准教授
委員	山崎 洋一	神奈川工科大学 創造工学部 准教授

#### 神奈川県教育委員会教育局高校教育課

橋本 雅史（専任主幹兼指導主事） 浅野 和行（指導主事） 鈴木 拓郎（指導主事）

#### 横浜緑ヶ丘高等学校

坂元 久美子（校長）、上原 志郎（副校長）、高木 祥子（教頭）、澤出 由紀子（事務長）、保田 直樹（総括教諭）、稲葉 智芳（教諭）、石野 弘明（教諭）、伊藤 理沙（教諭）、笹野 凧（教諭）、下司 耕輔（教諭）、花田あゆみ（教諭）、吉村 憲二（教諭）、SSH研究推進委員会の生徒2名

#### 1 今年度のこれまでの取組について

- 生徒SSH研究推進委員からの報告（1年生1名、2年生1名）
    - 1年生：探究（実験）の授業が少ない。感性工学会に参加して身近なものを感じた。
    - 2年生：昨年は水に興味がなくやる気になれなかった。今は自分の興味を明確に調べることができる。
    - 菊池委員：友人間で探究の話ができるのはよい環境である。雑談から広がるアイデアがある。  
そこから個人で深めることができるのは良いこと。
    - 苫野委員：1年生から自由なテーマがいいか？来年のほうが楽しみであるか？水の探究があったから次に進めると思うか？
    - 生徒：テーマは絞ってあるほうが探究のことを知れるからよい。2年生の探究のほうが楽しみだが、ある程度選択肢があってもいい。「水」のテーマのもと選択肢が広がっているのよい。
    - 山崎委員：できるようになったこと、できなかったことのリスト化をするとよい。学会で学んだことを共有できるとよい。
  - テーマⅠ、Ⅱについて
    - 宮野委員：答えのないのが探究。テーマ設定のときは今までのテーマを見せるもの手。限られた時間という制約があるが、実験や探究しやすいテーマ設定をさせないようにしたい。没頭するような探究活動を。
    - 苫野委員：着実に進化している。“きれいにまとめるのが得意”で終わらせず、テーマに浸りきる必要性がある。3年かけて何ができるようになるかを伝えるのも手。全員の評価を5にする気持ちで没頭する探究をさせたい。
    - 山崎委員：先輩から時間がないことを伝える場があるとよい。評価が成功失敗関係ないことを伝える。
  - テーマⅢ、Ⅳ、その他の取組について
    - 菊池委員：新しい人とコミュニケーションをとって活動する経験はよい。その経験を生徒間で伝えるとよい。
    - 苫野委員：経験できる場が豊富になってきている。撒き餌のようなイメージで雑でもいいからテーマを広げて、やっていく中で狭めていくくらいの気構えでいると楽しいのでは。
    - 山崎委員：多種多様な取り組みを続けてもらいたい
- #### 2 SSH次期申請に向けた取組について
- 宮野委員：採択されたらうれしいと思うこと。やりたいことを書く。採択されたくて書くのは違う。
  - 苫野委員：撒き餌の充実。本物との出会いの機会を多くする。本物の応援団を募る。探究サポーターがいるとよい。
  - 山崎委員：継続的なイベントを盛り込む。他校との連携など。
  - 菊池委員：データでも生徒が作成したものを保存する。知の情報拠点に人がいる。サロンのようなイメージの場所であるとよいと思う。
  - 立川委員：同窓会が充実している。OBOGの大学生に来てもらって探究のテーマをもらう、話しあう機会があるとよい。

80期（1学年）研究テーマ

	メインテーマ	サブテーマ
1	髪のカットを守ってCutieに♡	水の種類による髪への影響
2	雨の力で発電はできるのか	エネルギー枯渇問題を雨の力で潤したい
3	その水熱中に効いている？	熱中症に効果的な水の塩分濃度や温度ほどのものだろうか
4	家で温泉気分を味わうことはできるのか？	～おうち温泉チャレンジ～
5	水のおいしさは何によって決まるのか？	～硬度、温度、飲み慣れの観点から考える～
6	米の研ぎ汁の再利用	米の研ぎ汁で豆苗は育つ！？
7	塩分と海洋循環の関係	塩分が海洋にもたらす影響とは
8	海と川の境界線はどこ？	塩分と生物相から境界を探す
9	手洗いにおける汚れの効率的な落とし方	～汚れごとに影響するのは何か～
10	肌の保湿に最適な液体とは	～肌への浸透率が高く・揮発性が低い液体とは～
11	コーラは歯を溶かすのか？	～みんなの歯を守るために～
12	温泉と美肌	～温泉による美肌効果は成分によるものだろうか～
13	水はけのいい土は土砂災害の被害を減らせるのだろうか	
14	入浴剤って本当に効果があるの？？	
15	植物の成長に水の硬度は関係するの？	～植物が好む水を見つけてよう～
16	色の違いによって、水の味の感じ方がどう異なるのか	
17	軟水・硬水と食べ物との関係性は？	<食べ物における硬水のメリットを踏す>
18	ストローのひだの本数と飲み残し	～ストローの形状は飲み残しの量にどう影響するのか～
19	プラスチックの形状・密度どちらが水流による移動の変化に大きい影響をもたらすのか	
20	硬度の違いによるかき米に対する影響はあるのか	～一口の感動をプロデュース～
21	水の電気分解の物理的妨害	
22	汚れが落ちやすい最適な水温は？	
23	水の流れと発電量にはどんな関係があるのか	
24	色で感じる味の違いについて	～色によって味の变化を感じるか？～
25	ヘアカラーの色落ちを防ぐには？	水道水と海水とプールの水での色落ちの違いを調べよう
26	水の種類と飲み物の味との関係	
27	栄養のとおり方は熱中症予防にどう影響するのか？	

80期（1学年）研究テーマ

	メインテーマ	サブテーマ
28	神の力は存在するのか	Do you believe in God?
29	水以外の液体による豆苗の発芽・成長の変化	
30	運動とスポーツドリンク	～最も回復力のあるスポーツドリンクを求めて～
31	非常時に清潔な水を確認する	
32	温泉の効能は再現できる？	～効能と成分の関係性を分析せよ!!～
33	海の色を決める微生物	神奈川県における微生物と海の色との関係
34	液体による表面張力の違い	～液体の種類や濃度は表面張力にどう関わるのか～
35	髪を早く乾かす神生地！	
36	汗。	～汗と運動量について～
37	水の硬度が料理に与える影響とは？	～水が操る弾力と風味の比較検証～
38	水イイじゃん	～水はどのような環境や条件下でおいしくなるのか～
39	水溶液の溶質による物質の変化の違い	
40	海の色の変化はなぜ起こるのか	～田代法、片瀬西海岸の海の色を形成する要素は何か～
41	最強の麺が食べたい！	～硬水・軟水は麺の美味しさに影響するのか？～
42	災害時に雨水を活用するために	～雨水で電池は作れるのか～
43	自然由来の材料を用いた水のろ過効果の比較研究	～活性炭、木炭、軽石のうち最も水をきれいにするのどれか～
44	安全な水、飲みたくない？	
45	効果的な入浴方法とは	～睡眠との関係性～
46	植物はどの水を好む？	
47	水垢の発生条件と除去に適した酸性物質	
48	飲み物の力でカラオケの点数を上げたい！！	～飲み物はカラオケの点数に影響するのか～
49	色水を凍らせると、色はどこに溜まるのか	
50	いい汗をかく運動を見つけよう	～目指せ汗女～
51	カフェインと集中力の関係	～カフェインの摂取は集中力に影響するだろうか～
52	ポトルリップの適切な水の量はいくらか？	～水を制する者がポトルリップを制す～
53	液体によるホットケーキの厚みの違い	～ふわふわなホットケーキを作りたい！～
54	利用者の数と海水浴場のきれいさの関係	～ゴミとCODから見る神奈川県海～

79期 (2学年) 研究テーマ

メインテーマ	サブテーマ
1 トロッコ問題について	～緑高の思考回路は?～
2 名前が持つイメージとその人の印象は一致するのか	～「人を疑うとき、作用するものは?」～
3 詐欺師になろう	
4 日本人の自己肯定感と成育環境	
5 第一印象が決まる瞬間について	
6 声でモテるには	
7 ごめんね雑草、君は悪くない。でもテニスコートは譲れない。	
8 綾瀬市に鉄道を通すには	～全国6市のみ、鉄道未開の市からの脱却～
9 日焼け止めの品質を保つ	～日焼け止め界の高温多湿とは～
10 Feel free to にんにく	～野菜にんにくにくを食べるには～
11 スポーツにおけるパフォーマンス向上術	～僕のマッスルアカデミア～
12 BIG3とその他の筋トレ方法の違いとは	～カフェイン摂取量とパフォーマンスの関係～
13 カフェイン摂取時における身体能力の向上について	
14 声から顔を出力するAI	
15 怖いと感じさせる要素は何	～一番怖い映像を作るには～
16 倍音を増やすには	
17 持続可能なおにぎりライフ	
18 香りが決め手!味の錯覚!	
19 辛さと話し方	～多様なパンの膨らみ方を解明する～
20 パン生地が目覚めるとき。	
21 山手駅周辺にチェーン店が少ない理由を探る	
22 BeRealの流行と高校生の承認欲求の相関関係について	
23 時代の流行と歌詞の関係性	
24 緑高生に捧ぐ!! 私たちの全カブレイリスト	～楽器の印象とそれが与える音楽への影響～
25 アンサンブルの合い方	
26 推しと私たち	～スマホ操作と体感時間の関係～
27 緑高生の時間の浪費を防ぐ	
28 年代別の音楽の特徴と歌い方の違い	
29 "OOっぽい音楽"とは、どのような要素でそう感じられるのか?	
30 地球のための工作!!	～貴しやすしいバットボトルの形とは?～
31 ベーシックインカムから考える日本の社会保障について	
32 染め物とSDGs忘れてるようじゃだめか～。	
33 新しい手遊びを考案しよう!	
34 黒人音楽のビートについて	
35 テーブルゲームでコミュニケーションになるろう	～遊びは最高の学びであるーアールベルト・アインシュタイン～
36 Disney混雑調査	～混雑しているDisneyの楽しみ方とは～

79期 (2学年) 研究テーマ

メインテーマ	サブテーマ
37 万国共通のうまいめし!	
38 韓国コスメVS日本コスメ	
39 麻雀	
40 環境負荷の少ない食後の片付け方	
41 背景音楽を効果的に使い購買意欲を高めることはできるのか	
42 SNSと自己肯定感の関係	
43 横浜緑ヶ丘高校の傾向調査	
44 暗記は神略だ!	
45 SNSにおけるプロフィールアイコンの特徴と使い方が印象形成に与える影響	
46 プレスリリースと株価の関係	
47 人気キャラの特徴とは?	～二次元における人気な男性キャラの特徴を探る～
48 その山手、どの山手?	
49 理想の体を手に入れる	
50 口癖ってなあに? どうして存在するの?	～口癖は人格の鏡写し編～
51 傘は雨具として本当に優秀なのか	
52 身近なものに潜む髪にいい成分は何か	
53 伸縮性のある生地の特徴とは	～ネズミくんのチョッキから考える～
54 服の素材や色によって紫外線の通し具合は変わるのか	
55 聞きやすい音ってなに	～文化祭で人を集めよう～
56 数列の規則性を考えよう	
57 最強の消毒液を作る	
58 BAZZ理論	～SNSでより多くの人に目てもらいために～
59 自由研究に革新を	～自由に満ち溢れた研究を～
60 万人受けする声	
61 方言に対する認識	
62 朝気望気で天気は予測できるのか	
63 天気と睡眠の関係	～これで君も気象予報士～
64 色と熱吸収の関係を探る	
65 勉強で使用した紙の有効活用方法を探る	
66 紙ストローより神ストロー	
67 素材によって菌のつきやすさは変わるのか?	
68 緑高生だけのオブピーク通学を見つめよう!	
69 農業を熟知しよう	
70 緑のチカラが生む快適性	
71 ネコの身体能力を活かしたい!!	

78 期 (3 学年) 研究テーマ

邦題	英題
1 時代小説に影響を与えるのか	I wonder if epochs effect novels
2 単語帳の最適解	Settle your word book on this list!
3 女性アイドルから読解クイズエンタターの存在	Gender through Female Idols
4 ハックermanが購買意欲を与える影響	Effect package design give purchasing motivation
5 見て、わかる！脳に、のこる！広告とは	"See it, Remember it, That's an AD"
6 睡眠の質	quality of sleep
7 アボリシナルアートの普及	Popularization of Aboriginal art
8 AIに促される、AIを促して	Don't be used by AI, Use AI
9 ~福田塾~ 高学歴目指して	志Takida Juku社 - Aiming for Academic Excellence
10 共学空白どう埋める？ ~多岐岐院院問題における解 答番号傾向の統計的な推測~	How to fill the Blanks in the Common Test? ~ Statistical Prediction of Answer Number Trends in Multiple-Choice Questions~
11 ポーカーのすゝめ	The Appeal of Poker
12 AIによる「打倒！河野玄斗」~共学満点余裕~	Let's beat Kono Gento
13 暗記に効果のある飲み物は？	mystery science
14 美味しいダイエット食	Guilt-free deliciousness
15 美味しいピザを焼くには	Make a delicious Pizza
16 味よし！健康によし！お惣菜メニュー完全再現！	Delicious and Healthy! Complete reproduction of side dish menu!
17 Healthy Diet !!	Healthy Diet !!
18 麺は本当に伸びるのか？	Do noodles really get longer?
19 調理方法は卵焼きのふわふわ度にごんな影響を与えるか	Fluffy of eggs
20 心地よい音について探る~1/4秒らぎの定義とは~	Research for comfortable sounds ~What is definition of 1/4 fluctuation~
21 ホラ映画をBGMで克服する方法	Let's beat the horror movie!
22 現代の人々はなにで曲をジャンル分けしているのか	What elements do people today use to categorize songs?
23 効果的な読書のためのアプローチ	Approaches for efficient music reading
24 線高の中で勉強に適している場所はどこ？	Where are the best places to study at Midorigaoka High School?
25 A×O、B×O、サビの自動識別	Automatic Identification of A melody, B melody, and Chorus
26 声と姿勢の関係	The relationship between voice and posture
27 いい音ってなんだだろう？	What makes a good voice?
28 大学生の物件選びの重要ポイントとは	What is the important points of choosing property?
29 自分の身は自分で守る	My bodyguard
30 英単語の勉強法で1番効率がいいのは何か。	What is the most efficient way to study English words?
31 効果的な学習	effective study
32 交通網をどのように発達させていけばよいのか	How to develop the transportation network
33 責任能力判断の基準を明確にする	To clarify the criteria of Mental Competency
34 都会の路線バス/駅の廃止を阻止するには	How can we prevent the abolition of urban route buses?
35 抹茶の効果的な売り方とは	Effective Ways to Market Matcha
36 電車において席を譲りやすくするにはどのような方法か	How can we promote seat-offering on trains?
37 煙の中で黒く色は何色か	What colors can be seen in the smoke?
38 音楽で通学時間を救おう	Rescue by music!

78 期 (3 学年) 研究テーマ

邦題	英題
39 暗記効率を上げたい	Improve my memorization efficiency
40 睡眠時間と学力には関係性があるのか	Relationship between sleep and academic performance
41 衝撃 緒高生の履修値を80にしてみた！	Make Ryokko Great Again!
42 おいしくダイエット！ ~油そば編~	Delicious Dieting! ~Abura soba edition~
43 英語の単語を覚えて日本人の発音向上	Improving English Pronunciation with Tongue Twisters
44 宗教論争	religion
45 日英の慣用句の共通点	Point of idioms in common between Japanese and English
46 シャンプーと色落ちの関係	Shampoo and hair color
47 アイシャドウにウォータープルーフ革命を！	A waterproof revolution in eyeshadow!
48 化粧水成分の肌への浸透は本当に起きているのか	Is the penetration of lotion ingredients into the skin really happening?
49 プリーチ毛をもう痛ませない！ No/Yes/ハゲ！	No More Damage to Bleached Hair! Say Goodbye to Dryness!
50 ふわふわな氷を作るには	To make fluffy shaved ice
51 頭痛を緩和する匂いはいはどのようなものか	Let's cure headaches!
52 酢の酸味を抑える菌も通した酢はどわか~菌滅の刃~	Vinegar contest ~Blade of Bacteria~
53 ヒトラの餌食量が出芽量に与える影響	The Impact of Feeding Intensity on Budding Dynamics in Hydra
54 気づいて？ お弁当に潜む菌	Bacteria Hidden in the Lunch Box
55 アメリカホネナシカズラの果実調査	The investigation of Cuscuta pentagona
56 火山灰がアミエキリン Giraffa reticulata の素材に適切か？	Is volcanic gravel suitable for the floor of the reticulated giraffe (Giraffa reticulata)?
57 菓物の凍結効果による細胞変化と世界の砂糖過多への対策	Sweetness changes by freezing fruit and Solutions to prevent excessive sugar intake
58 タイズ Glycine max の発芽の速さに光は関係するのかわか	Is sprouting speed of soybeans (Glycine max) involved with light?
59 従来の白濁より涼しい日傘を作れるのか？	Is it possible to create a parasol that is cooler than conventional one?
60 鈴木真二から学ぶ、紙飛行機の真髄とその先	Essence of Airplane
61 線高のWi-Fi環境を改善する	Improving the Wi-Fi Environment at Ryokko
62 ハンカチを忘れた時の対処法	If you forget your handkerchief...
63 水たまりができてくいと校庭を考えよう	Let's Design a Schoolyard Where Puddles Don't Form
64 口笛が吹奏時に役立つ可能性は？	Could whistling be useful in a disaster?
65 言葉の発達と日本人の精神の関係とは	Changes in words and Japanese spirit
66 中学生における授業の無駄：先生側と勿論的介入方法の検討	Don't you get sleepy when you have a class with that teacher?
67 強い泥団子ってなんだよ！	Strong mud ball?
68 ASMRは集中力に良い影響を与えるのか？	Does ASMR have a positive effect on concentration?
69 良い参考書とは	What is a good reference book?
70 犯罪をやる人にとどのような特徴があるのか~ミステリー漫画による調査~	What characteristics do criminals have?~ Investigation by using mystery comic books~
71 知らない若者の自殺 一なげ自ら命を絶つのか~	Suicide among young people in Japan
72 ccレモンの最適おルールとは	What is the best rules of CC lemon game?

網掛けは日本語ボスター-発達の優秀グループ

教育課程表

入学年度		令和5(2023)～令和7(2025)年度						
小学科または類型		普通科						
学年		1年	2年	3年				小計
教科	科目	学級数	7	7	7			
		標準単位			I型	II型A	II型B	自由選択
国語	現代の国語	2	2					2
	言語文化	2	2					2
	論理国語	4			2	2	2	2
	文学国語	4		2				2
	国語表現	4						2
	古典探究	4		3	5			2
地理歴史	地理総合	2	2					2
	地理探究	3		2	4			3
	歴史総合	2	2					2
	日本史探究	3		2	4			0,2,6
	世界史探究	3		2	4			0,2,6
	地理研究*				2			0,2
	日本史研究*				2			0,2
	世界史研究*				2			0,2
公民	公共	2		2				2
	倫理	2			3			2
	政治・経済	2			3			2
数学	数学Ⅰ	3	3					2
	数学Ⅱ	4		4				4
	数学Ⅲ	3				5		0,5
	数学A	2	2					2
	数学B	2		1		1		1,2
	数学C	2		1		1		1,2
	数学研究α*				6			0,6
	数学研究β*						5	0,5
理科	物理基礎	2		2				0,2
	物理	4				6	6	0,6
	化学基礎	2	2					1
	化学	4		3		3	3	3,6
	生物基礎	2	2					1
	生物	4				6	6	0,6
	地学基礎	2		2				0,2
保健体育	体育	7～8	2	2	3	3	3	7
	保健	2	1	1				2
芸術	音楽Ⅰ	2	2					0,2
	美術Ⅰ	2	2					0,2
	書道Ⅰ	2	2					0,2
外国語	英語コミュニケーションⅠ	3	3					3
	英語コミュニケーションⅡ	4		4				4
	英語コミュニケーションⅢ	4			4	4	4	4
	論理・表現Ⅰ	2	2					2
	論理・表現Ⅱ	2		2				2
	論理・表現Ⅲ	2			2	2	2	2
	英語論文読解*							2
家庭	家庭基礎	2	2					2
情報	情報Ⅰ	2	※	※				1
	情報Ⅱ							2
総合的な探究の時間		3～6	※	※	※	※	※	0
緑の探究*	緑の探究Ⅰ*		2					2
	緑の探究Ⅱ*			2				2
	緑の探究Ⅲ*				1	1	1	1
	計		31	31	23	28	26	0～8
ホームルーム活動			1	1	1	1	1	3
総計			32	32	24	29	27	0～8
備考 (* 学校設定教科、科目)		<ul style="list-style-type: none"> <li>学校設定科目「緑の探究Ⅰ」「緑の探究Ⅱ」は、それぞれ「総合的な探究の時間」1単位、及び「情報Ⅰ」1単位の代替とする。「緑の探究Ⅲ」は「総合的な探究の時間」の代替とする。</li> <li>3年Ⅰ型は地歴科の「探究」と「研究」は同一領域で6単位、公民科の倫理と政治・経済で6単位、「数学研究α」で6単位のうちから選択する。なお、3年で地理歴史での「探究」を選択する場合には、2年で選択した「探究」と同じ領域とする。</li> <li>3年Ⅰ型は自由選択として「古典探究」を選択することはできない。</li> <li>2年で必修選択として「地理探究」を選択した者は、自由選択として「地理探究」を選択することはできない。</li> <li>3年Ⅰ型で必修選択として「倫理」及び「政治・経済」を選択した者は、自由選択として「倫理」及び「政治・経済」を選択することはできない。</li> <li>3年Ⅰ型で必修選択として「数学研究α」を選択したものは、自由選択として「数学BC研究」を選択することはできない。</li> <li>3年Ⅱ型は自由選択として「国語表現」「英語論文読解」「数学Ⅰ」「数学BC研究」を選択することはできない。</li> </ul>						